半径2M以内で

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半径２Ｍ以内で

【Ｎコード】
Ｎ９９１９Ｙ

【作者名】
ミナ

【あらすじ】
ありふれた雑貨にまつわる恋の話。お題に沿った読み切り短編集。
お題配付元：ＴｏｙＢｏｘ様（ｈｔｔｐ：／／ｒｉｗａｈａｒｕｋａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／）

ブックカバーの裏側

午後９時２０分。
今日はやけにいつもより遅いな、と焦れつつ帰りを待つ。
和食好きなヤツのためにせっかく煮物を作ったというのに、それはもうテーブルの上で冷めてしまっている。
メールでもしてみようか、と一瞬思ったが、そのすぐ一瞬後には既に後悔していた。
なんで私が。恋人でもないくせに。
自嘲気味に笑ったとき、玄関からロックを外す電子音が聞こえ、ドアの開閉の音が続いた。

「おかえり」
啓都（ひろと）は“ただいま”を返さない。
それは今日だけでなく、初めてこの部屋に来て以来、ずっと続いている事象だ。
挨拶の代りにひそやかな、それでいてはっきりとした溜息。
「…なんでまたいるんだよ」
「今日は煮物だよ。好きでしょ？」
答えになっていない答えに、啓都の目がちらりとテーブルに向く。
席に着いてくれるかと、少しばかりの期待はすぐに裏切られた。
「メシ食ってきたし。明日早いから風呂入って寝る。お前はもう帰れ」
「…明日土曜じゃん」
休みの日に早く出かける用事なんてないくせに、と言外ににじませたのに気づいたらしい。
バスルームに向かいかけていた啓都は、軽く顔を顰めて振り返った。
「おい、出戻り。俺はさみしいお前と違って、休みに出かける相手も用事もあるんだよ」

「出戻りって言わないで！」
苛っとしてつい大声を出した私に、啓都は疲れたように溜息をついて、今度こそバスルームへ行ってしまった。

出戻り、という言葉はふさわしすぎて嫌いだ。
一回りも上の人と大学卒業してすぐに結婚。
年上の人に憧れて、舞い上がって、早々に現実に突き落とされた。
派手な女性関係に疲れ果てて、2年で離婚。
結婚式の日に、まじめな顔で“幸せに”と言ってくれた啓都は、戻った私に殊更冷たかった。
周りの人のように形だけの励ましや慰めさえくれず、ただただ、冷たい。

啓都は幼馴染みだ。
実家は間に1軒挟んだ同じ階のマンション。
誕生日は3日違いで、生まれた病院から大学までずっと一緒だった。
家族のような気軽さからしょっちゅう口喧嘩はしたが、それでも啓都は優しかった。
私があんな馬鹿な選択の誤りさえしなければ、多分今でもそのはずだった。
ひどく疲れていた日々に、気づけばいつも思い浮かべていた啓都の優しさは、今はもうない。
それでもどうして啓都の部屋に出入りしているかといえば、幼馴染みの恩恵だ。
啓都の母が、啓都もひとりだし、暇なら時々食事でも作りに行ってやって、と鍵をくれたのだ。
初めて鍵を使った日、啓都は返せと言ったけれど、おばさんにもらったものだ、と言い訳して返さなかった。
今までも、何だかんだと言いながら啓都は私のわがままを聞いてきた。

それが当然という身勝手な習慣が抜けない私は、幼馴染みという藁に縋っている。
案の定、啓都はそれ以上鍵のことは何も言わなかったし、多重ロックのための暗証番号も変えなかった。
勝手に作った料理も、何も言わずに食べていた。昨日までは。

やけに遅い帰り、手つかずの料理、休日のお出かけ。
想像したくない答えが弾き出される確信にも似た予感が、胸をざわつかせる。
「女…？」
思わず自分で言葉にしてしまったその答えに、思いの外衝撃を受けた。
落ち着こうと、部屋を見回す。
私はそれまで、啓都のもの以外何もない、誰の影も見えないこの殺風景な部屋に拠り所を見出していた。
それなのに、今はそうは思えなかった。
啓都に拒絶され、見放されたような、眩暈に似た気分の悪さに襲われる。
最後に目に入ったのは、部屋の片隅に置いてある鍵付きの箱。

何事にも例外はあるものだ。
殺風景なこの部屋の片隅にあるその箱は、啓都のものではないものが入っていると思われる。
物騒にも南京錠までかけられたその箱が、唯一私の知らない誰かの影を知らせる。
こんなときに、そんなものが目に入るなんて。
啓都が完全に私を放り出すという例外が、すぐ目の前に迫っている気がした。
気分が悪い。

私は立ち上がり、テーブルの上の料理をゴミ入れに投げ捨てた。
その惨めな姿が、自分と重なる。
例外は目前なのではなく、もしかしたら既に起こったのかもしれない。
恐ろしい想像に追い立てられるように、まだ続いていたシャワーの水音を背に部屋を出た。

啓都の部屋に行くのは平日の夜だけだ。
啓都が誰かと出かけたはずの土曜日は、啓都の傍の自分でない誰かのことを考えて苛々と過ごし、
日曜日になる頃には、そんな自分自身に呆れて疲れ切っていた。
こんなことになってようやく、自分の中の確かな気持ちに気付くなんて。
開いた口がふさがらないとはこのことだ。

そして月曜日。
沈んだ気持ちのまま、それでも意地のように啓都のマンションへ向かった。
決定的な言葉を聞くまでは、なんて馬鹿馬鹿しい言い訳をする。
心なしか震える手で鍵を差し込み、暗証番号を入力する。
ロックが外れる電子音にほっとしたりして、自分がいよいよ腹立たしい。

部屋は金曜日とほとんど変わっていなかった。
土曜日の誰かの影を見せつけることなく、相変わらず啓都のものだけが広がっている。
変わっていたのは、私が料理を捨てたゴミ入れが空になっていたこと。
そして、例の“例外の箱”がリビングから姿を消していたこと。

捨てたのか、それともどこか別の部屋に移動したのか。
“例外の例外”もあるのだろうか。
好奇心が抑えきれなくなった私は、そろそろと部屋を移動し始める。
啓都が書斎として使っている部屋のドアをそっと開け、中を覗いてみたが、箱は見当たらない。
もう一つの部屋は、ベッドルームだ。
さすがにそこを覗くのは憚られたが、好奇心には敵わない。
恐る恐る覗きみると、ベッドの傍のローテーブルの上に、果たして箱はあった。

箱の蓋は閉じられている。
けれど、付けられていた南京錠は切断され、箱の脇に無造作に放られていた。
蓋を開けようとして手を伸ばしたが、やはりそれは許されないだろうと引き戻す。
“例外の例外”を期待している自分が哀しくもあり、そんな自分を断ち切るようにリビングへ戻ろうとした。
だが慌てたせいで勢い余ってつんのめってしまい、縋ろうと伸びた手の先はその箱。
床に倒れこんでしまった私のすぐ横に、手がぶつかってぐらついた箱が落ちてきた。

ガツッ。
箱の角が床にぶつかり、その衝撃で蓋が外れて中身が床にぶちまけられる。
倒れていた私の手に触れたのは、紙。
小さな長方形、つるつるとした手触りのものが、何枚も。
「…写真？」
起き上がりそれを見れば、小さなころから大学のころまでの、私と啓都の写真だった。

何枚も何枚もあるそれらは、確かにこの大きな箱一杯に詰まっていたと想像は難くない。
「でも、なんで…？」
写真を、わざわざ鍵を付けた箱に入れる必要性はどこにあるのか。
切断された南京錠は、鍵をわざとなくしていたためとも取れる。
そんな必要性が、私との写真になぜあったのか。
写真を箱に戻しながら考えるが、予想さえできない。

そのとき、ビビッドなドット柄が目に飛び込んだ。
写真に相応しくないその色に、私は弾かれたように反応した。
それは、昔はまって、いろいろな本に着けていたブックカバーだ。
そういえば、啓都に貸したまま返ってこなかった本が一冊あったのだった。
本を手にし、タイトルを確かめるようにカバーを外す。
「封印再度…懐かし」
自分の記憶が間違っていなかったことに、小さく笑いが漏れる。
どんな内容だったっけ…とページを捲ろうとした時、扉に隠れたところに黒い点が見えた。
気になってさらにカバーを外すと、明らかになる黒い点の集合。

“君想う　２０ＸＸ．５．４”

「な、に…これ」
それは、間違えるはずもない、何度も目にしたことのある啓都の筆跡だ。
そして日付は、私の散々に終わった結婚の始まりの日だ。
心臓が、いやな音で鼓動する。
本当に、見てはいけないものを見てしまった気分だった。
鍵をかけて“封印”したものと、それが鍵を壊した今持つ意味とは何なのか。

確かな意味を独りでは掴めきれないことも、私を焦らせる。
私はその本を手に握りしめたまま、茫然と空を睨んだ。

真っ暗な世界に、急にオレンジ色の光が差し込み、目が眩む。
それがリビングの照明だと気づいて、私は慌てた。
茫然としていた間に、とっくに陽は暮れ夜の時間になっていたらしい。
啓都が帰ってきたのにも気づかなかった。
立ち上がりかけたところで、啓都が部屋に入ってきてしまった。
「ひ、ひろ…」
「何してる」
不機嫌そうに私を見やった啓都は、私の手にしていたものを見て目を剥いた。
「…お前、見たのか」
「あ、ごめん。わざとじゃ…」
最初は見ようとしていただけに、小さな声になってしまう。
啓都はもう一度ゆっくりと聞いてきた。
「見たのか」
私は、もう声も出せずに小さく頷いた。
その途端、啓都は大きく息を吐き出して床にしゃがみ込んでしまった。
驚いて啓都の傍に行くと、啓都は手で顔を覆ってしまう。
「啓都？」
「見るなよ」
「え？　あ、ごめん…。あの、ぶつかって落ちちゃって、それで…」
言いながら啓都を覗きこむ私の顔に、啓都が手を伸ばす。
「じゃなくて、今俺を見るな、って」
「な、なんで？」
啓都の指先が顔に少しだけ触れて、私は図らずして声が震えた。
掴みきれなかった意味が、鮮明な形になった気がしたからだった。

顔の前に翳された手の指の隙間から見える啓都は、リビングの光の色を差し引いても、赤みがかっている。
「…かっこわりぃ」
くぐもった声でごちた啓都が、それが正解だと告げていた。

いつもの不機嫌そうな冷たい物言いじゃなく、拗ねたような物言い。
昔の優しい啓都の、穏やかな物言い。
それに気づいて、急に涙が出た。
冷たくされた時には出なかったのに、今になって溢れた。

うれしい。うれしい。うれしい。
渇いていた心が、急速に満たされていく。
満たされて、溢れ出して、涙となって零れ出したのだ。
その水滴が、啓都の指に当たり、驚いて顔をあげた啓都と目が合う。
「なに、泣いて…」
「ごめん…」
「何が」
想いに気づかなくて。
幸せに、と言ってくれたのに、応えられなくて。
ずっと甘えてて。
他にも色々ありすぎて、何も言えなかった。
優しい声が嬉しくて、とにかく何か伝えたくて、咄嗟にキスをしていた。
唇と唇が軽く触れ合うだけの、中学生みたいなキス。
それすらも、震えるほどの緊張感。同時に、満足感。
「…すき」
喉が詰まって、掠れた声しか出なかった。
必死に、もう一度同じ言葉をどうにか舌に乗せるけれど、同じ声だった。
苦しくて、もどかしくて、どうにもできないでいた私を受け止める

のは、やっぱり啓都で。
宥めるように首筋をひかれて、背中をあやすように撫でられて、落ち着く。
「俺も、冷たくして悪かった。もうしないから、そんなに泣くなよ」
泣いた理由もわかってしまう辺りが、啓都らしい。
子どもに言うみたいな言い方に思わず笑った私に、優しい視線が注がれていた。

散らばった写真を片づけながら、そっと啓都を窺う。
視線に気づいた啓都が、小さく笑って私を抱き寄せる。
ローテーブルに寄りかかった啓都と向かい合わせの姿勢で、啓都の肩の先で南京錠が目に入った。
封印が破られて、切断された錠。
けれど、今封印したのは、似合わない冷淡さと、散々な過去だ。
破られない錠のある場所に、永久に。

ブックカバーの裏側（後書き）

ちなみに。
土曜日出かけたのは、単なる休日出勤でした。
見栄張っちゃった啓都は、お風呂を出て捨てられた料理を見て我に返る、と。
啓都サイドではそんな感じの動きがあったのでした。
ストーリーに生かせない力不足をひしひしと感じます…。

“封印再度”は実際にある小説ですが、中身とは関係ありません。
単に“封印”という言葉をかけさせてみたかったのです。それだけです。

マウスを握る手

「ひよこ、これやり直し」
そろそろ帰ろうかな、と思っていた時に無情な声。
しかもまた“ひよこ”呼ばわり。
恨めしげに目線を右へ移すと、ひらひらとレポートが振られている。
「室長。名前、ひよりですから。ていうか、安西（あんざい）です！」
「これくらいのレポートも一発で通らないようじゃ、ひよこで十分。
この検証、結局どの年代層に一番効果的かあいまいなままだぞ。
書き方工夫しろ」
さくっと流され、痛い言葉と一緒にレポートを突き返されてしまう。
何を言っても暖簾に腕押し、こっそり溜息をつきながら戻ろうとすると、「明日までな」と追い打ちをかけられる。
これで今晩は残業が確定だ。

室長は、私と大して年が離れていないのに、私が入社した時は既に主任だった。
入社したすぐ後の直属の上司で、会ってすぐ私の名前を捩って“ひよこ”と命名するようなふざけた人なのに、
独特の手法で的確に顧客のニーズを割り出すことが上層部に評価され、
それから2年、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでこの販売企画室の室長にまで昇進してしまった。
それに対して私はといえば、実際3年目なのに名前のせいとだけは言い切れない“ひよこ”状態。
着眼点が面白い、なんて言って室長は人選権を持つ今も相変わらず私を直属の部下に置いてくれているが、
見合う仕事ができているのかいないのか、自信はない。

コンピュータと睨み合いを続けているうちに、どんどんと他の社員が帰っていく。
あっという間に午後8時を回り、気づけば私と室長だけが部屋に残っていた。
しんとした中に、コンピュータのファンの音と、キーボードをたたく音、マウスのクリック音が響く。
工夫しろと言われた書き方に悩み、途中で行き詰った私は、ちらりと室長を窺う。
視線を上げないまま見ると、まず最初に目に入るのは左手。
左利きの室長は、左手でマウスを握る。
小さく手首を返し、ボタンとホイールの上をときどき指が滑る。
その手に、相変わらずどきりとさせられるのだ。
掌が大きく、指が長くてしなやかな、その手は男性の割には線が細い。

その手で、どんな風に触れるのだろう。
その手で触れられたら、どんなだろう。
そんなことを思わず想像せずにはいられない。
いつからそんな風に見るようになったのか、もうわからなくなっていた。
好き、なのだと思う。
見るたびにこんな妄想めいたことを想像してしまうくらいに。
室長には、浮いた話はなく、役員たちにしょっちゅう呼び出されては見合いさせられるも、
いつもそつなくこなし、そしてさりげなく断られるように仕向けているらしい、というのが専らの噂だ。
実はゲイなんじゃないか、なんていう恐ろしげな噂まで密かに出回っている。
まさかね、と思ったところで、急に室長が立ち上がった。

不意打ちにびくり、と体が震え、顔をあげてしまうと、室長の訝しげな視線とぶつかってしまう。
「なに」
「や、何でも、ないです」
壊れたロボットのような返答に内心冷や汗をかいたが、室長は何も言わずに部屋から出て行った。
荷物を持たないで行ったところを見ると、まだ帰りはしないらしい。
室長の姿が見えなくなったところで、詰めていた息を一気に吐き出した。
「びっくり、した…」
まさか、見ていたことに気付いただろうか。
仮に気づいていても、頭の中で想像していたことまでは気づかれないだろう、とひとまず安心する。
そしてちっとも進んでいないレポートに視線を戻し、慌てて頭を仕事モードに切り替えた。

ディスプレイの前に、突然紙袋が差し出される。
ビルの向かい側にある、ファストフード店のマークが見えた。
「腹減ってると効率下がるだろ。こんなもんで悪いけど」
今出かけたのは、食料調達をしに行ってくれていたらしい。
残業のときは自分も最後まで残って絶対にひとりにしないこととか、食事をさせてくれるところとか、
こういうさりげなく優しいところに、だんだん絆されたんだろうか、私は。
感謝の言葉を口にしながら、室長から紙袋を受け取る。
その際に目に入った室長の指先に、またもやどきりとさせられて慌てた。
自分の席に戻るのかと思った室長は、私の左隣のデスクに自分の分の食べ物を広げ始めた。
その様子に少しだけ驚いて見つめていると、室長が目線をこちらに

寄こす。
「…戻ったほうがいい？」
「え？」
「ひよこが嫌なら、自分の席で食べるけど？」
「嫌じゃないです」
思わず即答してしまって頭を抱えたい気分になったが、いまさら撤回もできない。
「なら、ひよこも早く開けて食えば」
私の動揺なんて気にも留めていない言い方に、そうですね、と小さく呟きながら紙袋を開ける。

どうせ私は、“ひよこ”なのだ。
優しくしてくれても、それはそれ。
私の持つ感情とは全く次元の違う、“親鳥”の気持ちに違いない。
ファストフードのハンバーガーですらキレイに食べる、その指先に視線を奪われながら、ちょっと落ち込む。
考え込んで食べるスピードの鈍った私をよそに、室長は隣で手早く食事を済ませていく。
そして私が半分も食べないうちに、後片付けまで終わらせてしまった。
私の様子をちらりと見た室長に気づき、さきほどこんなので悪いけどと言われたことを思い出した。
あまり進んでいないから気を遣わせたかもしれない、と焦って少し多めに口に入れた途端、咽てしまった。
「っごほ、けほっ」
「おいおい、無理すんなよ。大丈夫か？」
慌てた室長が、飲み物を差し出して、背中を軽く叩いてくれる。
その手が触れた瞬間、背中にぴりりと何かが走った気がして、ストローを咥えたまま室長を見上げてしまった。
視線に気づいた室長は、何とも言えない表情を浮かべて手を離した。

離さなくてもよかったのに…とは、もちろん言えなかった。
微妙な空気のまま、私はもそもそと残りのバーガーを食べる。
その間、室長はそのまま隣のデスクにいた。
ようやく食べ終わって、ペーパーナプキンを取り出そうとしたとき、
室長がこちらを向いた。
「なぁ、ひよこはさ。いっつも見てるよな、俺のこと」
一瞬、何を言われているのかわからず、中途半端な姿勢で固まってしまった。
ぎしぎしという音が聞こえそうな、ゆっくりとした速度で首を左に回す。
「違った。俺じゃなくて、俺の手か」
「え…？」
意味のない音しか、出てこない。
気づかれていた、その衝撃が静かに全身に広がっていく。
動けない私の顔を見て、室長はふわりと笑った。
そしてそのまま、左手を伸ばしてきた。
その親指の先が触れたのは、私の唇の左端。
「ケチャップ、付いてた」
指に掬われたそれは、そのまま室長の口元に運ばれる。
恥ずかしい。
さっき背中に触れられたのとは違う、明らかに意図的な接触に戸惑う。
でもそれ以上に、触れられた一か所からじわじわと襲う甘い痺れに、
居ても立ってもいられなくなる。
どうしよう、どうしよう。
もうここから逃げ出してしまいたい。
ついに腰を上げようとした私の、今度は両腕が掴まれて引き戻される。

「あ…」
「逃げるなよ」
両方の二の腕から、また新しい感覚が這い出す。
その感覚から逃げるようにギュッと目を瞑るけれど、逆に感覚が研ぎ澄まされたようで居たたまれない。
慌てて目を開けば、今度は目の前に室長がいて、別の意味で慌ててしまう。
「なぁ、俺の手はさ、普通の手だよ。それでもひよこがこんな風になるのは、どうしてなの」
「ど、ういう…意味ですか」
「…俺の手を見てる時、自分がどんな顔してるかわかってる？　それにさっきから俺が触るたび、どんな顔してるか気づいてる？」
わかっているから、だから逃げ出したいのだ。
室長もそれをわかっていて、それでもそうやって聞き出そうとする理由は何？
「もう、離してください…」
「どうして」
「室長は、わかってるじゃないですか！　なのに、ひどいです。私のことなんか何とも思ってないんだから、面白がらないで、放っておいてください」
手は緩まない。
外してほしくて、体を捩ろうとするけど、びくともしない。
そのかわり、笑いを含んだ溜息が落ちてきた。
「強情だな。俺が何とも思ってないって、なんで決めつける？」
「え？」
「ほんっと“ひよこ”だよなぁ。普通何とも思ってない子のこと会社で渾名で呼んだりしないし、
残業の時わざわざ一緒に残ろうとか、隣でメシ食いたいとか、絶対思わないと思うんだけど」
「え、あれ？　残業って、私のときだけですか、最後まで一緒に残

ってくれてたのって…」
「…気づいてなかったのかよ。あれだけ俺のこと見てたのに、ほんとに手ばっかり見てたんだな」
ひどい言われように思わず口を尖らすと、そこにちゅっと軽く唇が触れて、驚いて仰け反る。
室長の顔は、もう面白くて仕方がない、っていう雰囲気がありありと浮かんでいて、ちょっとむかつく。

あぁ、それにしても、いつから私の視線に気づいていたのだろう。素直にその疑問をぶつけてみると、室長は少しだけ苦笑した。
「最初から。というより、そもそも俺が見てたんだよ」
「は？　なんですか、それ」
「だからさ。俺のほうが先に好きになってたってことでしょ。
そしたらいつ頃からか逆に視線感じるようになって、最初は半信半疑だったけど当確っぽかったから。
あーあ、言わせてみたかったんだけどな。結局俺が言わされたか…」
いつ頃からか、って言うけれど、私が室長をつい見てしまうようになったのは、もうずいぶん前からだ。
ということは、それよりもはるかに前から室長が私を見ていたということになる。
そういえば、残業をし出してから一度もひとりきりになったことはなかった。
「…信じられない」
「ははっ、でも本当だし」
「だって、実はゲイじゃないか、とか噂されてたりしてましたし」
「はぁ？　それ信じてたのか」
「え、いや…その、まさか、とは思ってましたけど」
根も葉もない噂に大げさな溜息をつく室長を見ながら、だんだんと驚きが落ち着いてくると、今度は嬉しさがこみ上げて来る。

しかも、これからは堂々と見てもべつに咎められたり焦ったりする必要が無いんだと気づいて顔が緩んだ。
「お前、今なんかよからぬこと考えてないか」
「えっ？」
「どうせ、今度から見放題とか思ってたんだろ。妄想だだ漏れ」
ほとんど当たっている言葉に、ぎくりとして室長を見上げる。
室長は擬態語で言うとまさに“にやり”という顔をして、私の腕を掴んでいた手を微妙に動かした。
撫でられるような感覚に、落ち着いていたはずの甘い痺れがまた這い出す。
「あ…」
「やっぱり、いいなぁその顔。まあ、今度から俺も触り放題ってことで、おあいこだな」
おあいこ、って。
私が見るのとじゃ、全然レベルが違うんですけど。
相変わらず触られたままで、ぞくぞくする感覚に耐えている私は、口を噤んだまま心の中で抗議するが、聞こえるはずなんてない。
「バカな噂も、嘘だって思い知らせてやるよ。そのうち」
不穏でアヤシげな言葉に、さらにぞくりとさせられる。
室長は立ち上がると、私の肩をぽんっと叩いて、ついでに耳たぶを軽く抓んでから自分のデスクに戻っていく。
「とりあえず、レポートが先ね」
私は、耳を押さえてデスクに突っ伏してしまった。
室長は絶対ドＳだ。
こんなんじゃ、仕事なんてできやしない。
室長の小さな笑い声が聞こえて、なんでこの人を好きになってしまったのだろうと本気で考えてしまった。

マウスを握る手（後書き）

オフィスラブです。
とある残業日のシーンでした。
ステキな上司がいるって、いいですね…（遠い目）。

小物入れの中の鍵

臆病だったと思う。
信じるに足る人だと、頭ではわかっていたのに、怖くて逃げてしまった。
古い傷が痛んで、さらに新しい傷ができた。

定時で上がって寄り道もせずに家に帰る毎日。
お風呂に入って、食事もせずに、テレビをただ流してぼーっと過ごす。
何か考え出すと際限なく落ち込みそうで、あえて何も考えないように、頭の中を真っ白にする。
けれどそれも、ベッドルームへ行くまでの無駄な抵抗だ。

ベッドサイドのライトの仄かな明かりに照らされて、それはきらきらと輝いている。
蓋つきの小さな四角い小物入れ。中身が何なのかは、知らない。
小さいくせに確かな存在感を持って、私の愚かな決定を責め続けているように見える。
多分それは、自分が馬鹿なことをしたと、していると、本当はわかっているからだ。

―俺のこと、思い出したら。
　そしたらその時に、開けてみてよ。

この箱は、そんな言葉と一緒に渡された。
諦めを含んだ、静かな声だった。
私は何も答えられずに、箱だけを受け取った。

3か月前のあの日。
聡史（さとし）は終始息苦しそうに話をしていた。
3年間関西の支社に出向の内示が出て、受け入れざるを得ないのだと。
仕事なのだからどうしようもない、ということは私にもわかっていた。
けれど、それと恋愛関係を続けることは私にとっては別の問題だ。
遠距離恋愛は、過去に一度失敗している。
それも、相手の浮気を目撃するという最悪の形で。
それ以来、遠恋は死んでもしない、というスタイルを貫いていた。
この話は聡史も知っている話だ。
だから、聡史は話している間中、あんなに苦しそうだったのだ。
私が、“別れる”と言うだろうことが、わかりきっていたから。

聡史の予想の範囲を超えることなく、私は別れると言った。
そう言うと思った、と静かに言われた。
そのとき、これで終わるのだと思うと、かつて無いほどの寂しさと喪失感に襲われた。
それでも撤回しなかった。できなかった。
怖くて、怖くて、たまらなかったから。

そして最後の別れ際、聡史はこの箱を手渡してきた。
“思い出したら”？
それどころか、今の私は、会いたくて会いたくて毎日辛くてしょうがない。
実のところ、忘れたことすら無いのだから。
限界はとっくに超えている。
ずっと、蓋を開けたくなくて、同じくらいずっと、開けたくてしかたなかったのだ。

今日こそ開ける。
毎日そう思ってきたが、それも今日で終わりにしようと思う。
本当に、本当に、今日こそ開けるのだ。
ぎゅっと目をつぶり、覚悟を決めて指をかける。
そっと蓋を開けると、中身は銀色に光るものと、一枚のカードだった。
鍵だ。
一体どこの、と思い慌ててカードを捲る。

“美穂が、俺を信じてくれる気持ちになったら、
この鍵を使ってほしいと思う。
俺が本社に戻る前までには、使ってくれてるといいと思うけど”

メッセージの下には、住所の走り書き。
「…っ」
急に嗚咽がせりあがってきた。
聡史は、一体どんな気持ちでこんなメッセージを書いたのだろう。
一体どんな気持ちで、この箱を渡してくれたのだろう。
信じてほしい、と言葉で言わせなかったのは、私だ。
私は自分のことばかりを考えて、聡史の気持ちを無視し続けた。

会いに行こう。
まずは謝って、それから、会いたかったと素直に言ってみよう。
もしかしたら本当は、ずっとそうしたかったのかもしれない。
多分、そうなのだ。
だからこそ、それからの行動は早かった。
翌日の空いている飛行機のチケットをすぐに手配し、出かけることにする。
けれど土曜日のせいかほぼ満席で、取れたのは夕方遅くの便だった。

ほとんど荷物も持たず、まさに飛び乗った、という出で立ち。
慣れない土地でタクシーを使い、ようやく聡史の家にたどり着いたときには、午後8時を回っていた。
休日だから、もしかして家にいるかもしれないし、逆にいないかもしれない。
どきどきしながらアパートの階段を上がる。
扉の前で様子を窺うが、電気は付いていないようだった。
バッグの中から、小物入れを取りだす。
“使ってほしい”ということは、留守の時でも上がってもかまわないのだと思う。
けれどそれもどうかと思い、鍵を握りしめたままドアの前に座って待つことにした。

10分ほどそうしていると、下で車の音がして、その後階段を上ってくる足音が聞こえ始めた。
他の部屋の人が帰ってきたのかもしれない、と思ってびくりとする。
どうしよう、と焦りつつ動けないでいると、階段を上りきった人が目の前で立ち止った。
「お客さん？」
この場にいるのは、自分と今上ってきた人だけだ。
話しかけられているのか、と思って顔を上げると、綺麗なひとがこちらを見つめている。
「この部屋に、来たの？」
「え…？」
この部屋、と言って指差したのは、私が背にしているドアだ。
ぶわっと、嫌な汗が出た気がした。
ちらりと目に入った、そのひとが手にしているキーホルダが、見たことのあるものだった。
昔聡史が集めていた食玩のダブったものたちが連なっているもの。
「もしかして、美穂、さん？」

その言葉に、私は弾かれたように立ち上がった。
「失礼しますっ」
「えっ？　ちょっと…！」
後ろで何か言われた気がしたけれど、立ち止まらず振り返らずに階段を駆け下りる。
ちょうどあと数段、というところで、階段を上ろうとする人影とぶつかる。
はっと顔を上げると、聡史だった。
驚いたような顔の聡史が目に入ったが、今はそれどころじゃない。
「さよなら！」
小さく強く、それだけ叫んで、走り出した。

土地勘のない私は、闇雲に走った。
走ったことと、たった今のできごとのショックで、鼓動はひどく乱れている。
ちょうど大通りに出て、目に入ったコンビニに入った。
昼からろくに食事を取っていないのに走ったせいか、視界がぐらぐらしている。
何か食べるものを買おうと思ったが、それでも食欲はない。
飲み物だけ買おうと冷蔵庫の前に行くと、ガラスにひどい顔が映った。
居たたまれない気持ちになり、結局何も買わずに店を出てしまっていた。

こんな惨めなことが、あるんだ…。
宛てもなく歩きながら、ただそんなことを考えていた。
携帯が鳴った。
さっきから、何度も鳴っている。
見なくても、聡史からだろうと想像がつくから、見もしない。
それでもすれ違う人から迷惑そうな視線が向けられ、音は切ろうと

電話を取りだした。
そのとき。
後ろから思い切り肩を掴まれた。
「美穂！！」
「痛…っ」
「あ、ごめん」
謝ってはいるが、力は緩まない。
聡史は、ずっと走っていたのか肩で息をし、前髪が汗ばんだ額に張り付いていた。
こんな風に追いかけてくるなら、どうして浮気なんかするんだろう。
あぁ、私が別れると言ったから、もう浮気じゃないんだっけ。
そう思ったら、今までどうにか我慢していた涙が、ぼろりと零れた。
「美穂…」
困ったように名前を呼んだ聡史の顔が、ゆがんで映る。
「あの、さ。今美穂が多分思ってること、絶対誤解だから」
「何それ、わけわかんない。言い訳なんてしなくていいよ。別れるって言ったの、私だし」
「美穂。なんでここ来てくれたの。俺を信じる気になったからじゃないの」
たった今、信じられなくさせたのは誰だ、と噛みつきそうになった時、聡史の携帯が鳴った。
ディスプレイを見た聡史は、私を掴む力を緩めないまま電話に出た。
「あぁ。今、捕まえたから。免許証出しとけよ」
もしかして、さっきの綺麗なひとだろうか。
前半は私のことを言っているのだろうと思ったが、後半の意味がわからない。
しかも、浮気相手に私のことをわざわざ報告するのがまたよくわからない。
どうせ掴まえられて逃げられないのだから、おとなしくしていよう、と顔を俯けた。

電話を切った聡史が、私の顔を上げさせて、頬に残った涙の跡を掌で拭う。
久しぶりの感触と温度に、逆立った気持ちが少しだけ落ち着き、頑なだった心が少しだけ和らいだ。
「美穂。俺は、誤解だって言った。美穂はどうしたい？
信じたいなら、このままついてきて。無理なら、鍵はもう返して」
「なにその究極の選択…。ひどいよ」
「じゃあ、ついてきて。お願い」
「それはずるい…」
「だから、誤解だって言ってるじゃん。ほんとに信じられないの？」
「わかってるよ…ついてく」
聡史は嘘をつかない人だ。
それに、実はそれ以上に信じたいと思っている自分がいた。

部屋に帰ると、あの綺麗なひとはビール片手にソファでくつろいでいた。
そして私の顔を見るなり、笑顔で近寄ってくる。
「さっきはびっくりさせてごめんねぇ。変な近づき方しちゃったからいけなかったのよね。
私、浮気相手なんかじゃないからね。ほんとよ。ハイ、これが証拠」
差し出されたのは、免許証。
さっき聡史が電話で言っていたのはこれのことか。
「あ、苗字と本籍地が一緒…」
「そうなの。私、実の姉です」
「え、えぇっ！！？」
あまりのベタな展開に、声がひっくり返ってしまった。
そういえば、姉が2人いるとか聞いたことがあるような…。
「あの、それは大変、失礼しました…」
勘違いが恥ずかしいやら情けないやらで、小さくなって謝った。

「いいのよぉ。それより、何かあったらいつでも相談しに来てね。
聡史の弱点とか、いろいろ教えてあげるからね」
そんなことを言いながら、お姉さんはプライベート用の名刺を渡してくれる。
そして、外でエンジン音が聞こえると、邪魔者は消えます、なんて言って早々に帰ってしまった。
小さな嵐のような人だ、と思った。

ほっと一息つくと、掌の力が抜けて、握りしめたままだったものが滑り落ちた。
床に硬い音が響き、鍵が転がる。
拾おうとしたら、同じく拾おうとしてくれた聡史と指先が触れあった。
どきりとして一瞬手を引くと、鍵は聡史に拾われ、私の手の中に落とされた。
「あ、りがと…」
言うのと同時に、腕を引っ張られ、聡史の腕の中に取り込まれる。
あったかい。
じわり、と温度が伝わって、心音が共鳴する。
心まであたたかくなった気がして、素直に言葉が出てきた。
「…ごめんね」
「何が」
「信じてあげられなくて。逃げちゃって」
「ん」
「あと、ありがと」
「何が」
「信じさせてくれて」
「うん」
「…会えて、嬉しい。ほんとは、ずっと会いたかったよ」
背中に腕をまわして、ぎゅっと抱きつく。

聡史の腕の力も増して、ぴたりと体が密着した。
「会いに来てくれて、ありがとうな」
耳に滑りこんだ聡史の声が、充足感とともに体中に伝わっていく。
肩越しに見えた、バッグの中の小物入れは、今度こそ美しく輝いて見えた。

小物入れの中の鍵（後書き）

遠恋のお話でした。
会えない分、不安とかいろいろ多そうですよね。
いくらメールや電話やウェブカメラがあっても、ぬくもりは感じられないし。
結局、お互いの気持ちと信頼が命綱、みたいな気がします。
そんな切なさが少しでも書ければなぁ…と思いましたが、中途半端だった気もします。
なんせオチがベタすぎましたので^^;

ちなみにお姉さんは、大学時代から関西住まい。
弟がかわいくてしかたなくて、しょっちゅうアパートに入り浸っていたりする人。
でももうすぐ結婚予定だったりして。
そんな裏設定も、まったく小説には反映されませんでした…（がくっ）。

増えすぎたCD

2分違いで鳴るアラームが頭上に3個。
おまけに3個ともスヌーズ機能が生きている、しかもその間隔も1分ずつときた。
どう考えても、嫌がらせとしか思えない。
「う、るせぇ…」
朝が苦手な俺のためにアラームをかけるのは、あいつが帰る時の習慣だ。
泊っていって、直接起こしてくれりゃいいのに、と何度か言ったが笑殺されて久しい。
そういえば、最近全然泊っていかないな。
前にあいつが泊ったのって、いつだったっけか。
最近の俺たちは、つまりそういう感じだ。

つまんねぇこと思い出しちまった。
苛つきながらベッドから降りると、脇に積んであったCDたちに足がぶつかった。
「い、ってぇー…！」
朝からろくなことがない。
足の小指は痛いし、積んであったCDがばらばらに床に散らばった。
片づける気力もなくぼーっと眺めていると、同じジャケットのものが、何組か目に入る。
「あー、ったく！」
全部あいつのせいだ。
ここにいないあいつに向かって、意味のない悪態をついた。

きっかけは、1枚のCDだった。
高校に入学して1か月くらいしか経ってないときだったと思う。

どうしても欲しかったインディーズのアーティストのＣＤが売り切れで、へこんだまま翌日学校に行ったら、
あいつがその俺の欲しかったＣＤを持って女友達と話していたのだ。
「なぁ、それ貸して！」
全然話したこともなく、名前すらうろ覚えだったのに、咄嗟に声をかけてしまった。
一瞬驚いた顔をしたけれど、あいつはそれからすぐに貸してくれた。
話してみると、音楽の趣味はかなり近かった。
すぐに友達になって、いろんなアーティストの話で盛り上がって、距離が近づくのは早かった。
それからいろんなライブに一緒に行くようになったりして、夏休みには付き合い始めていた。

それから、もう7年。
青いガキだった俺はマスタコースに入り、あいつは一足先に就職している。
その間、相変わらず音楽の話題は尽きず、好きなＣＤを買ったり貸し借りしたり。
どちらのかもわからなくなったＣＤ、同じＣＤを買って持ち合ったせいで同じものが2枚あるものも多い。
そのせいで俺の部屋には、ふたり分のＣＤがどんどん溜まっていくはめになった。
手持ちのＣＤラックではとうてい足りず、何個か買い足して、さらにこうして何段も積み重ねてきた。
増えすぎたＣＤの数と同じだけ重ねてきた長い時間を思うと、妙な気分だ。
蹴飛ばして散らばったＣＤのように、最近の俺たちの一緒に過ごす時間は、日々忙殺されて散っている。

どうして、今でも一緒にいるのか。

ふたりだとちょっと窮屈なところもあって、でもそのくせひとりだと寂しい。
これは愛情ゆえなのか、それともただの情なのか。
この頃ではそれもよくわからない。
でも結局、離れるのは無理なんじゃないかと思っている自分もいる。

帰ろうと研究室から出たところで、メールが入る。
学校の入口まで来たから会えないか、というものだった。
あいつがここまで来たことは今までに片手で数えるくらいしかない。
何かあったのだろうか、ずいぶん珍しいこともあるもんだ。
すぐ行く、と返信して足を速めた。
どこか、浮かれている自分がいることに気づいた。

門のところへ着くと、あいつは2人組の男に声をかけられていた。
7年も一緒にいるといい加減目も慣れてくるというものだが、あいつは実はけっこうキレイだ。
こんな場所にひとりで立っていれば、必ずと言っていいほど誰かに声をかけられる。
そういえば、最初のころはムキになって追い払っていた気がする。
懐かしいな、青かった俺。
この頃はそれも当り前のこと、みたいな変に達観したような気分でいた。
今日は、いつもと違う行動をしたあいつに触発されたのかもしれない。
青い俺が、戻ってきた。

あいつの肩に手をかけて、少し強めに俺の陰に引き寄せた。
「悪いけど、こいつは売約済み」
そう言って、そのまま手を取って、歩き出す。
“売約済み”って、いつの時代の文言だよ、と青い俺に突っ込みを

いれつつ、ちょっとテンションが上がった。
ただ握られたままだった手に力が入って、握り返されたのがわかる。
ちら、と様子を窺うと、その眼には最近のいつもとは違う何かが見え隠れしていた。

あぁ、こいつは気づいていたのだ。
俺が一緒にいながら、妙に冷めていた部分に。
そして、こいつも俺と同じようにどこか冷めていた部分を持っていたことも。
「もしかして、試した？」
「…どうかな。ケジメはつけたほうがいいかな、とは思ってたけど」
「それで、どうケジメつける気でいんの？」
「どうしようかな。売約済みみたいだし」
「じゃぁ、おとなしく買われとけよ」
言葉で遊びながら、手が指と指を絡ませるつなぎ方に自然に変わっていく。
なんだ、俺たちどうせお互いが離れられないんじゃんか。
やっぱり、離れるのは無理だろうという俺の予想は、外れそうにない。

愛情でも、ただの情でも、もう構いやしない。
どうしたって好きなもんは好きで、嫌いになんて絶対ならない。
結局愛情だって、情のうちじゃねぇか。
「指輪でも買い行くかー」
「なにそのノリ。いきなりすぎ」
「そ？　じゃ、ひとまず今日は泊ってけ」
「それって、全然ケジメないし」
「久々じゃんか。やなの？」
「……やじゃないけど」
あ、やばい。

久々に、めちゃくちゃ抱きしめたくなってきた。
「とりあえずさ、帰んない？」
「うん。あ、そうだ。今日ＣＤ買ったんだけど」
「げ」
朝散らばったままにしたＣＤを思い出した。
けどまぁ、ずっと一緒にいるなら、どうせこれからも増え続けるのだ。
朝に、ふたりして蹴飛ばすのも、それはそれでいいのかも。

増えすぎたＣＤ（後書き）

７年も付き合ってるって、どんな感じなんだろう。
と思いながら、書いておりました。
逆に結婚の踏ん切りがつかなそう…とか予想したりして。

男視点でも、意外と書けたのでよかったです。
俺、あいつ、こいつ、というのばかりで名前を出しませんでした^^；
なんかちょっと独白チックで書けて、楽しめました。

事務用ボールペン　1

急いで上っていた階段の踊り場で、遠心力に逆らえなかったボールペンが滑り落ちた。
気づいて焦ってそちらの方向を向くと、今度は携帯電話までが落ちてしまった。
「何やってんの、あづさちゃん」
「相変わらずドジっ子だな」
からかうように笑う生徒たちの声に、内心で軽く悪態をつきながら、顔に苦笑を浮かべる。
その中の一人が落ちた携帯を拾ってくれ、別の一人はボールペンを拾ってくれた。
なんだかんだ言っても高校生、口は悪くても中身はかわいい子どもなのだ。
ボールペンを拾ってくれた子が、不思議そうな顔でペンを見つめている。
「あづさちゃん、このペン変わってるね」
「何これ、普通こんなん売ってなくね？」
「よく言われる。でも書きいいんだ。拾ってくれてありがとね」
受け取ってお礼を言ってから、また階段を駆け上る。
教科室が4階にあるというのは、もう何年もまともに運動していない身としては拷問に等しい。
次の授業の教室は1階で、下りきった途端使うはずのプリントが無いことに気づいて、駆け戻ってきたのだ。
教科室に入って、私は息を整えた。
拾ってもらったボールペンを見ると、せっかく落ち着いてきた鼓動が、また跳ね上がるのを感じて舌打ちした。
もう、忘れたと思ったのに。

小テストを実施している間、私はついボールペンを見つめていた。
このボールペンは、もともとは私のものではない。
元の持ち主の、綺麗な姿が思い浮かんだ。
5年も前の話だ。
私は母校のここで、教育実習生だった。
当時の生徒は明るく活発で積極的で、すぐに仲良くなれたが、ひとりだけそうでない男子生徒がいた。
窓際の一番後ろの席に座る彼は、担当の先生によると、頭はいいが無気力で扱いにくい生徒らしかった。
確かに授業中も、教科書もノートも広げず、ぼんやりと窓の外を眺めていることが多かったように思う。
けれど、綺麗な顔立ちと色素の薄い髪や目は目立ち、話をしたことも無いのに、視界の端にいつも映っていた。
友達は多いらしく、よく談笑している姿も見かけた。

話をしないまま実習は2週目に入り、残すところもあと3日だけ、という日。
私は報告書を書くために、教科室ではなく図書館へ行った。
その日に限って、普段談話室にいることの多いベテランの先生方が、教科室にいたからだ。
自分の学生時代を知る先生もいて、気まずくて図書館へ逃げたのだ。
階段を上って2階に行くと、奥の学習スペースの端に、彼はいた。
夕日が当たって、髪がきらきらと光っていた。
吸いつけられるように、私の足は彼の座っている場所まで自然と進んだ。
手元を見ると、何冊かの本が広げられ、彼はメモ用紙に何かを書きこんでいた。
「変わったボールペンね」
咄嗟に出たのは、その言葉だった。
初めて声をかけるには、些か不向きな気がしたが、言ってしまった

ものは仕方がない。
手を止めて顔をあげた彼は、私の顔を見上げて、少しだけ笑った。
「よく言われます」
実際、そのボールペンは変わっていた。
よく見るキャップつきのものや、ノック式でクリップがついたものではない。
小さなホテルか何かのフロントや病院の窓口にあるような、全身真っ黒な細身の事務用ボールペン。
聞けば、彼の家は文具屋だそうで、一番安いが一番書き易いそのボールペンを、彼は気に入っているらしい。
話してみると、扱いにくいと言われていることが嘘のようだった。
彼は明るく快活で、よく笑い、話しやすかった。
やや遅れて、広げられていた本と彼が書いたメモを近くで見て、私は驚いた。
「フーリエ変換…」
2年生が春に見るものとしては、かなりレベルが高い。
この学校は理系だが、微積分は2年後期に触り程度やるだけだし、応用も3年で参考程度にやるだけだ。
頭はいいが、と言われたことを思い出した。
このときようやく、頭が良すぎて普通の授業レベルではつまらなかったのだ、と気づいた。
「だから、授業聞いてなかったのかぁ…」
思わずつぶやくと、彼は気まずそうに顔を顰め、聞いてないわけじゃ、ともごもご言う。
その様子がなんだかかわいくて、私は思わず声を出して笑ってしまった。
残りの3日間、彼は授業中相変わらず窓の外ばかりを見ていた。
けれど、時々ふと視線を感じたり、私が見ると急に視線が逸らされたりすることが多くなった。

私は私で、放課後は必ず図書館へ行くようになった。
彼はいつも同じ席にいて、数学を解いていた。
いつの間にか敬語の取れた彼と、バカな話もマジメな話もしたが、
数学の話もかなりした。
フィボナッチ数列について目のきらきらを増して話したりして、よ
っぽど数学が好きらしかった。
こんな数学好きが教師だったら、楽しい授業ができるだろう、羨ま
しいと思ったものだ。
実際そんな風に彼に言ったこともある。彼は笑っていただけだった
が。

そして、いよいよ最終日となったあの日。
私のボールペンの調子が悪くて、彼の変わったボールペンを借りた
のだ。
確かに、書き易かった。
書き終わって、挨拶をして別れようと、ペンを差し出しながら言葉
を選ぶ。
「じゃあ、元気でね」
またね、とは言えずにそれだけ言った。
ボールペンを掴むのかと思った、彼の手は、私の手首を掴んだ。
ほんの、2秒くらいだったかもしれない、無言で見つめあってしま
った後、
彼がその手を強く引き寄せたせいで、私は座っている彼の上に倒れ
かかるようにして腕の中に取り込まれた。
「なに…っ」
抗議の言葉は、呑み込まれた。
触れられて初めて、実は望んでいたのだと、思い知らされた。
少しだけかさついた唇の感触と、簡単に捉まって絡められた舌の感
触に、すぐに降伏する。
体の力を抜いてキスに応えると、後頭部を抑えつけていた手の力が

緩んだ。
代りに、うなじから背筋を辿って腰の部分まで、ゆっくりと撫でられる。
「んん…」
思わず漏れた声に、彼の口角が少し上がるのがわかった。
激しかったキスの応酬は、少しずつ緩やかになって、けれど余計に体の熱を燻らせた。
「あづさちゃん」
キスの合間、ほとんど唇をくっつけたまま、少しだけ掠れた声で呼ばれる。
生徒たちはみんなそう呼んでいたが、彼には初めて名前を呼ばれた。
「なに」
「…かわいい」
それだけ言って、またキスが降る。
頭がくらくらして、熱で浮かされたようだった。

突然鳴ったチャイムの音に、私はびくりと体を震わせた。
いけない、昔のことを思い出していたせいで時間を忘れるなんて。
「後ろから回収して。章末問題は宿題にします。今日は以上」
宿題、と聞いて生徒たちからブーイングが起こるが、笑ってその場を収める。
回収したプリントを持って、おざなりな号令を待った後、そそくさと教室を後にした。
そういえばあのときも、チャイムが鳴って、驚いて体を離したのだった。
あぁ、だめだ、また思いだしてる。
キスの感触と、彼に呼ばれた名前の響きが、まだ体に残っている気がする。
「あづさちゃん！」
呼ばれた声に、驚いて振り向くと、今まで授業をしていたクラスの

生徒が立っていた。
ばかな私、彼がいるわけないのに。
「どうしたの、すっげーびっくりした顔してるけど」
「ごめんね。ちょっと驚いちゃって。どうかした？」
「小テスト、渡しそびれたから」
「ああ、ありがとう」
手に持っていたプリントを受け取り、まだ訝しげな顔をしている生徒にムリにほほ笑んで、その場を後にする。
無意識に唇を覆っていた手に気づき、内心で苦笑する。
結局、全然忘れてなんていないのだ。

事務用ボールペン　1（後書き）

続きます。

事務用ボールペン　2

あの後、彼はそのまま階段を下りて行った。
「またね」
それだけ言って、行ってしまった。
残された私は、彼のボールペンを手に握ったままだった。
実際、それ以上何かがあったとしたら、大問題だったに違いないから、それはそれでよかったはずだ。
けれど私の中には、燻ったまま消えない何かが残ってしまった。
ボールペンを捨てることもできず、苦労して替え芯を買ってまで使い続けているのは、つまりそういうことだ。
彼がその後どうしているかは、もちろん知らない。
それなのに、どうしても最後の言葉が忘れられないでいる。
あり得ないと知りながら、忘れたふりをしながらも、いつか会えるかもしれないと今でも期待しているのだ。
そして、もし会えたら今度は、あのとき一度も呼べなかった彼の名前を呼んでみたいと思っていた。

「笹部　則幸（ささべ　のりゆき）か」
「懐かしい、あの数学バカですね」
教科室のドアを開けた時に聞こえた名前に、私は凍りついたように立ちつくした。
今思い出していた、一度も呼べなかった、まさにその名前だった。
「今村（いまむら）先生、ちょうどいいところに」
話しかけられて、はっと意識を戻した。
普段は皆談話室にいるため、この教科室は事実上私しか使っていない。
その教科室に、教科主任と補佐の先生が何の用事だろうと思っていると、プリントが差し出される。

プリントには、彼の情報が簡単に印字されていた。
「来週からの教生受け入れなんだが、数学科は一人だそうだよ」
「今村先生も知ってるんじゃないか？　先生が教生で来た頃ここの生徒だったんだが」
「あ、ええ…少しだけ」
「あいつはほんとに数学バカでしたね」
「はは、そうだったなぁ、まったく」
懐かしそうに笑う先生方に、扱いにくいと思われていたにしてはずいぶん柔らかい反応だと思う。
気になって、つい聞いてしまったが、逆に笑われてしまった。
「2年の途中からは、逆にかわいがられてましたよね」
「ああ、授業中あからさまにぼんやりすることもなくなったし。何より数学好きもここまでくるか、ってほどでな。よく談話室まで来て話しこんだもんだよ」
「その頃から教師になるなんて言ってましたけど、まさか本当になるとはね」
「そういや、あいつが変わったの教生帰った後だったな。誰の影響だったんだか。
笹部の実習は、私が担当するんだが、今村先生は年も一番近いし、何かと相談に乗ってやってくれ」
「ええ、わかりました」
先生方が帰って行った後、私は溜めていた息をやっと吐き出した。
主任と補佐の先生は、私が実習でここに来た時もいた先生だ。
何も知られているわけはないのに、どこかどぎまぎした気持ちになった。
それにしても、彼が実習に来るとは驚いた。
しかも、昔から教師になると言っていたとは、まさか、私の影響ではあるまい。
そもそも一体どんな顔して会ったらいいのか、まったく先が思いやられる。

授業の準備を終え、小テストの採点も残すところあと2人、という時。
ドアがノックされた。
「どうぞ」
こんな遅い時間、どうせ数学科の誰かだろうと思い、顔を上げずに採点を続ける。
ドアが開いて、歩いてくる音は、だんだん私に近づき、人影が私の横で止まった。
「あづさちゃん」
その声に、採点していたペンは停止した。
まさか、と思いつつそろりと顔を上げると、あのときよりも大人びた彼が立っている。
けれどきらきらした髪も、吸い込まれそうな眼も変わらない。
「久しぶり」
「…本物？」
「ははっ、確かめる？」
ゆっくりと、顔が近づく。
あと、数ミリで唇が触れあいそうなところ。
「ストップ」
「あ、ひでぇ」
笑いながら、素直に引き下がる彼に、少しがっかりしたりして。
「実習は来週からじゃなかった？」
「出入りしやすいのは卒業生の特権」
「だらしなく思われると心象悪いよ」
「ちゃんと挨拶してきたし。俺かわいがられてるから」
「そうみたいね。さっき聞いて驚いちゃった」
こんなに久しぶりなのに、意外と普通に話せてる自分に驚いた。
近況報告のような話をした後、少しの沈黙。

いつもより口が回ったのは、緊張のせいか、と思う。
何を話そうか、と思ったところで、彼の視線が固定されているのに気づく。
「それ、俺の？」
「え？」
視線の先を辿ると、あのボールペン。
しまった、と思うより先に、また、囚われる。
顎を捉えられて、まともに視線を合わせられてしまった。
「俺の、ボールペン？」
「そう」
「ずっと使ってたの？」
「…そうよ」
「俺のこと、思い出したりしてた？」
「してない」
「…うそつき。眼が揺れてるよ」
笑って話す声が、私を見つめる目が、顎に触れる指先が、甘い。
5年も経っているのに、そんな時間が何でもないように、すんなりと引き寄せられてしまう。
「俺、あづさちゃんのこと追いかけてきたんだよ。
教師に向いてるかも、って言ってくれたことあったじゃん。だからやってみようと思って。
そしたら、友達の弟があづさちゃんがここで先生してるって言うから。ここに実習受け入れ願い出したの。
いい加減、追いつかれてくんないかな。それとも、俺、もう追いつけた？」
「わかってるなら、聞かないで」
「じゃぁ、さっき寸止めにしたキス、させて。5年ぶりなのに途中で止めるとか、ひどすぎ」
返事も聞かずに、唇が触れて、すぐに離れた。
物足りない、と咄嗟に思った。もっと、5年分のキスがしたい。

話ももっとしたい。あと、それから何だっけ。あぁそうだった、名前が呼びたい。

「…笹部くん」

思ったより小さな声になってしまった。

初めて口にした音に、目の前にある顔が驚いたように私を覗きこむ。

「あづさちゃん、初めて俺の名前呼んだ」

「そうね。ずっと、呼んでみたかったの」

「知ってたの」

「何それ。当り前でしょ」

「下の名前は知ってる？」

「…則幸」

「うわ、いいなぁそれ。今度からそうやって呼んでよ」

「ダメ。しばらくは教生でしょ。笹部くんのまま」

「あづさちゃーん」

「それもダメ。私一応先生だし」

「生徒には呼ばせてるでしょ」

「ケジメつけなさい」

「じゃあなに、今村先生？　ふぅん…ちょっと、やらしい感じ」

「な、なによそれっ」

「だって、こうなるから」

何が、と聞く前に、唇がふさがれる。

どうしてこう不意打ちのキスが得意なのかしら、と思いながら身を任せる。

「先生…」

キスの合間に囁かれるのは、名前じゃなくて。

この部屋で、この呼び方で、こんなキスをするのは、確かにまずい。

「その呼び方、やめて…」

「じゃあ、あづさ」

急にされた呼び捨てに、どきりとした。ほんとに、不意打ちが得意

で困る。
実習中はきっと、仕事にならないに違いない。

事務用ボールペン　2（後書き）

なんか、ちょっと長くなっちゃいました。
ひとつにまとめちゃってもよかったのかもしれないのですが、
なんとなく、分けてしまいました。

教育実習生、ってなんかステキな人たちでしたよね。
高校は、高専だったせいか一度も来ませんでしたが、中学では毎年
何人か来てました。
先生よりも近くて、友達みたいに接してもらって、なんか楽しかっ
た記憶があります。
実際彼らから見て、生徒がどう見えてたのかはわかりませんが…て
か、クソガキと思われてた可能性もアリですけど^^；
あ、なんだか今さら心配になってきました…。

辞書ばかりの本棚　1

テーブルの上には冷めた紅茶と手の付けられていないガトーショコラ。
せっかく準備してもらったけれど、ひとりで頂くのは味気ない。
準備してくれたおばさんは、習い事があるからと出かけてしまい、この家に今いるのは、私ともう一人。
「諒（りょう）ちゃん、まだ～？」
「急かすなよ」
少しだけ、むっとしたような声が聞こえる。
でも、ひとりで待っているのも退屈なんだよ、と声に出さずに口答えする。
部屋に入るなと言われたせいで、同じ家にせっかくふたりきりなのに独りでいるなんて、つまらない。
わざわざ用事を作り上げてくるのに、それも意味がなくなってしまう。
もう３０分も経った、と言い訳して、そろりと足を忍ばせて諒ちゃんの部屋まで行く。
ドアのところから覗くと、諒ちゃんは机に向かって、たまに辞書をぱらぱらとめくってはペンを走らせる。
諒ちゃんは、ＰＣが苦手で相変わらず手書き主義なのだ。
勝手に入ると怒られるから、中には入らず廊下の床に座り込んで待つことにする。

諒ちゃんは、２年前からお隣さんだ。
本当は私が生まれる前からだけれど、私が幼稚園に行く頃、大学生になって外に行ってしまっていた。
最初の頃は夏休みやお正月に会っていたけれど、しばらくするとまったく見なくなった。

私は寂しくてこっそりひとりで泣いた。
会うといつも頭を撫でてくれる諒ちゃんが好きだったのだ。多分、初恋だった。
後からわかったことだが、その頃諒ちゃんは仕事で海外赴任になっていたらしい。
お隣のおじさんが亡くなった2年前、おばさんを心配して戻ってきた諒ちゃんは、記憶の中とは別人だった。
最後に会ってから、10年以上経っていたのだから、当然といえば当然だ。
けれど、優しくてあったかい雰囲気は変わらず、私はまたもや、あっさりと恋してしまった。
でも諒ちゃんは、ほとんど相手にしてくれない。
ひとりで家に来るな、部屋に入るな、とうるさいし、私が行動を起こさないと関わってもくれない。
大学生になっている私だが、15も離れていたら、やっぱり恋愛対象には見てくれないのだろうか。

紙の束で頭を軽く叩かれて、はっと上を見上げる。
「こんなとこに座り込むなよ」
「だって、部屋入れてくれないから」
「お袋がケーキとか用意してたろ」
「ひとりで食べるのやだ」
こんな風に言ってしまうところが、余計子供っぽく見られる要因だというのはわかっている。
諒ちゃんは軽く溜息をつくと、仕方なさそうに部屋に入れてくれた。
「もう少しだから、そこに座ってな」
小さめのソファを指差されて、でも部屋に入れてもらえるのが珍しくて嬉しくて、うきうきと座る。
また机に向き直った諒ちゃんを見て、それから部屋の中をぐるりと見回した。

諒ちゃんの部屋は、シンプルで物も少ない。
机、ベッド、ローテーブル、私が今座っているソファ、テレビ、PC、そして本棚。
通訳という職業柄なのか、本棚には辞書ばかりが何冊も入っている。
大部分は和英、英和、英英、和独、独和、独独、それらがしかも異なる出版社ごとに揃っている。
そして端のほうに日葡、葡日、日仏、仏日が何冊か並んでいる。
昔から使っているらしいものの中には、ケースが擦り切れているものもある。
なんだか諒ちゃんの歴史を感じて、いとしく思えた。

「ちぃ、終わったぞ」
諒ちゃんが、いつの間にかソファの前に来ていた。
座ったまま見上げると、目の前に分厚い紙の束が差し出される。
それは、半導体に関する研究論文の原文と諒ちゃんが訳してくれた分。
さっきから諒ちゃんが取り組んでいたのは、実は私が頼んだものだ。
「何度も言うけど、工業英語は専門外だからな。間違ってても文句言うなよ」
「うん。ありがと、諒ちゃん。…大好き」
最後のひとことは、かなり気持ちがこもった言葉だったが、諒ちゃんは気にも留めない。
「はいはい、ありがとね」
軽く流しながら、私を立たせて部屋の外へ誘導し始める。
抵抗しようにも体格差はどうにもならず、私は簡単に元いたリビングへ押し出されてしまった。
このままでは、玄関の外まで追いやられかねない。
「お茶！　途中だったんだ。諒ちゃんも飲むでしょ？　おばさん、ケーキ諒ちゃんの分も用意してたし」

「この後仕事で出なくちゃいけないんだよ。時間無いから、ちぃお前家に持ってけ」
つまり、やはり帰れということらしい。
無理やり論文の和訳を頼んだ身としては、時間が無いと言われてしまえば何も言えない。
諒ちゃんは手早く包んだケーキを私の手に持たせ、危惧したとおり玄関の外まで私を押し出した。
「じゃあな」
「うん…ありがとう」
バタン、と閉まったドアの音が、私と諒ちゃんの間に重く響いた。

諒ちゃんは、いつもこうだ。
私が好きだと言ってもいつも軽く受け流し、わざと論文を持ち込んでも訳した後さっさと私を帰らせる。
でも迷惑だとははっきりとは言わないから、私はそれに乗じたままでいる。
本当は、英語もドイツ語も苦手なわけじゃない。
論文だって、自分で訳そうと思えば普通に訳せる。
ただ、諒ちゃんと何かつながりを持っていたくて、だから諒ちゃんのところに持ち込むのだ。
全然進展なんてしないし、諒ちゃんには相手にもされていないけれど。
いつものことながら悲しくなって、諒ちゃんに持たされた2人分のケーキをやけ食いした。

チャイムが鳴って出てみると、習い事から帰ったおばさんだった。
よかったら夕食を食べにこないか、と誘われ、喜んで応じる。
うちの親は共働きで、遅くまで帰ってこないため、私は昔から家に一人でいることのほうが多い。
そのため、隣のおばさんは小さなころから何かと気にかけてくれて

いる。
うちの親より少しばかり年上だが、もう一人のお母さん的存在だ。
おばさんと一緒に家に入ると、いないと思っていた諒ちゃんがいた。
仕事じゃなかったの、と思いながら見上げると、諒ちゃんは気まずそうな顔をした。
嘘だったのだ、と気づいて、気分は地よりも落ち込んだ。
今すぐにでも帰りたくなったが、せっかく誘ってくれたおばさんのことを考えると、できなかった。

食事が終わると、諒ちゃんはすぐに自分の部屋に行ってしまった。
変な子ね、と訝しげなおばさんと、一緒に後片付けを済ませ、しばらく雑談する。
その頃には、落ち込んでいた気分は、だんだん腹立たしさに変わってきていた。
迷惑ならそう言ってくれればよかったのだ。
回りくどい嘘なんて、ついてほしくなかった。
やがておばさんに、お風呂に入るから、好きに過ごしていていいと言われた私は、諒ちゃんの部屋に向かった。
ドアは閉まっている。
入るな、と言われているせいで、開けるのは悪いことのような気がしてどきりとした。
でも、あいにく私は今怒っている。言いつけを素直に守る気分ではない。

ドアを開けると、諒ちゃんの驚いた顔がこちらを向いた。
「ちぃ、入ってくるな、って」
「嘘つき」
思いの外強い声が出た。
諒ちゃんが顔を顰めるのがわかる。
「嘘つくなんてひどいよ。迷惑なら迷惑って言えばいいじゃん！」

「声でかいって」
諒ちゃんの大きな手が、私の口を覆おうとする。
そんなことされたら、私がどんな気持ちになるかなんて、諒ちゃんはまるで頓着していないみたいだ。
腹立たしい気持ちがまたぶり返して、私は諒ちゃんの手を阻む。
「おばさんお風呂だもん、聞こえないよ。
諒ちゃんはさ、私が好きって言ってること、何とも思ってないの？
それとも、内心困ってて迷惑だから聞かなかったふりしてやり過ごそうとしてるとか？」
「…どっちでもない」
「じゃあ、なんで？　なんで嘘ついてまで私を遠ざけるの？」
諒ちゃんは話したくなさそうだったが、私はじっと待った。
ついに折れた諒ちゃんは、重い口をようやく開く。
「お前がまだ子どもだから」
「私、もう大人だよ」
「…俺からすれば、ハタチなんてまだ子どもだよ。
これからまだ出会いだってたくさんあるのに、１５も上の俺を好きだなんて、もったいないだろ」
「へりくつ。私が好きなのに、もったいないとか関係ない」
「なんにしろ、その年で俺に縛られるのはやめろ、ってことだよ」
「でも、じゃあ、諒ちゃんの気持ちは？　私のこと少しは好き？
それとも」
「俺の気持ちは関係ない」
私の言葉の上からかぶさる諒ちゃんの言葉が、それ以上先を言わせない。
こんな論議って無い。
諒ちゃんの気持ちは量れないままで、私の気持ちは間違っていると言われたことに、また落ち込みそうになる。
自然に視線が下がった私は、床に転がったスーツケースと、そばにある衣類を見て考えが急に途切れた。

言おうと思った言葉は頭から飛び、代わりに別の言葉が出てくる。
「どっか、行くの？」
「…あぁ、仕事で。カメラマンに帯同して南米に行くんだ」
「いつ？」
「来週」
「どれくらい？」
「さぁ。どれくらいになるかは、まだわからない。短くて1か月、長ければ年単位かも」
「そ、そんなに？」
私の脳裏に、昔のことが思い出された。
私はまた、寂しくてひとりで泣くことになるのだろうか。
急に押し黙った私を見て、諒ちゃんは私を諦めさせる好機だと取ったらしい。
「その間に、俺のことなんて忘れるだろ」
そんな言い草が、私には悲しくて腹立たしくて、言葉も出なかった。
挨拶もする気になれず、私はそのまま部屋を出ていく。
背中が、諒ちゃんの溜息を感じて震えた。

辞書ばかりの本棚　1（後書き）

続きます。

辞書ばかりの本棚　2

その後一週間、私は諒ちゃんの家に行かなかった。
何も知らずに誘ってくれるおばさんには悪いと思ったけれど、諒ちゃんに会いたくなかった。
いや、会いたかったけれど、意地になっていた。
それでもこの後いつまた会えるかわからないと思うと、結局会いに行ってしまうのだ。
出発の日、そっと部屋を覗くと、ほとんど何もなかった部屋から、さらに物が減っていた。
大きな家具と本棚の中身だけがそのままだった。

私に気づいた諒ちゃんが、部屋に入ってもいいと手招きしてくれる。
「よかったよ、出発前に会えて」
私に会えないことなんて、何とも思っていないと思っていたから、どんな意味にしても、その言葉は嬉しい。
「辞書勝手に使っていいから、論文ちゃんと自分で訳すんだぞ」
「…うん。ありがとう」
そんなことが言いたかったのか、と半分は期待外れ。
でもなんだか諒ちゃんらしい、というのがあとの残り半分だ。
「諒ちゃん…」
「んー？」
「あのね、諒ちゃんが何て言っても、私諒ちゃんが好きだよ。ほんとに」
できるだけ真剣さが伝わるように願って、想いを伝える。
諒ちゃんはまじめな顔で、でも少しだけ困ったように笑う。
「ちぃの気持ちは、嬉しいと思ってるよ。でもこの間言ったことは、今も思ってる」
つまり、私が子どもだから、気持ちは受け入れない、ということだ。

１５の歳の差は、やっぱり簡単には埋められないのだ。
「でももし…」
何か言いかけた諒ちゃんは、言葉を切り、そして止めた。
続きを聞こうとしても、首を振るだけで言ってくれない。
「いや、いいんだ。元気でな」
「…諒ちゃんも、気をつけてね」
昔と同じように、諒ちゃんが頭をそっと撫でてくれた。
指先の温度が伝わって、どきりとしたのと同時に、泣きたいような気持ちになった。

散々泣くのかと思っていたけれど、私は泣かなかった。
寂しい気持ちはもちろんあるけれど、諒ちゃんが居ない間に少しでも大人になってやる、と息巻いていた。
おばさんに教わってもっと料理をしてみたり、大学で研究にも身を入れたり、忙しい日々。
短ければ、と言われて期待していた1か月後、諒ちゃんはまだ帰ってこなかった。
教授に進められた論文が溜まってきて、諒ちゃんの辞書を借りようと思い立ったのは、６か月後。
家にはしょっちゅう行っていたけれど、諒ちゃんの部屋に行くのは、あの出発の日以来だ。

そんなはずはないのに、諒ちゃんのにおいがする気がして、深呼吸。
本棚の辞書に指を這わせて、諒ちゃんに想いを馳せる。
諒ちゃんが今どこでどんなふうに過ごしているのか、私は知らない。
おばさんですら、ほとんど連絡が来ないと言っているくらいだから、私に連絡が来るはずもなし。
「薄情者…」
口に出したら、急に寂しさが押し寄せてきて涙が出そうになった。
慌てて涙を押し込め、辞書を選ぶ。

諒ちゃんがたくさん使ったであろう、少しケースの擦り切れている辞書。
ケースから取り出し、なんとなく意味もなくページを捲る。
諒ちゃんが勉強の時に付けたと思われるいろいろな印やラインが見える。
と、途中に何か挟まっているのに気づく。
それは、使い込まれた辞書には相応しくない真っ白な、真新しそうな小さめのフラッシュカードだった。
取り出してみると、走り書きが目に入った。

“Ｓｏｒｒｙ，　Ｉ　ｇｏｔ　ｃｏｌｄ　ｆｅｅｔ，　ｓｏ　Ｉ　ｃｏｕｌｄｎ'ｔ　ｔｅｌｌ　ｙｏｕ　ａｎｙｔｈｉｎｇ”．
（自信がなくて、何も言えなかったんだ、悪かった。）
“Ｂｕｔ　ｗｈｅｎ　Ｉ　ｒｅｔｕｒｎ　ｉｆ　ｙｏｕｒ　ｈｅａｒｔ　ｓｔｉｌｌ　ｂｅ　ｏｎ　ｍｅ，　ｔｈｅｎ，　Ｉ　ｗｉｌｌ．．．”
（俺が帰った時に、もしまだ俺を想ってくれてたら、そのときは…）

カードを握った指に、ぎゅっと力が入った。
このメッセージは、私に向けられたものだろうか、多分そうだろう。
何も言わなかったのは、出発の日だ。
聞いても黙ってしまった、あのことを言っているのだ。
メッセージの意味に気づくにつれ、私は急に鼓動が早まるのを感じた。
気持ちが変わることはあり得ないが、それでももしも本当に想い続けていたなら。
諒ちゃんが帰るのをずっと待っていたら、そのときは諒ちゃんの本当の気持ちを聞くことができるということだ。
私は手の中のカードを、諒ちゃんのメッセージを、何度となく見返した。

他の辞書にも何かメッセージが残っているのか、と思い他の辞書も開けてみたが、無かった。
私が真っ先にこの辞書を選ぶと、わかっていたのだろうか。
そう思うと、何もかも見透かされているようで、少しだけ恥ずかしかった。

全く根拠のない自信だが、諒ちゃんの気持ちは肯定的な気がした。
そうでないなら、多分既にはっきりと言われていたはずだからだ。
そう思うと、少しだけ気分が楽になった。
私は、諒ちゃんの書いたメッセージの裏側に、私からのメッセージを書く。
そして、カードを辞書の中の元の位置に戻した。
諒ちゃんが戻ってきたとき、これを見たらどんな反応をするだろう。
想像して、私は知らずして笑顔を浮かべた。

長い間、夢を見ていた。
遠くで、おばさんと諒ちゃんの声がする。
懐かしいなぁ、もっと聞きたいなぁ、と思った時、今度は近くで声が聞こえた。
「ちぃ」
ぼんやりと目を上げると、諒ちゃんの顔が見える。
声だけじゃなくて姿も見えるなんて、なんてステキな夢だろう。
手を伸ばして触ってみると、あたたかかった。
「寝ぼけてるな」
「え…？」
夢ではない、と気づいた私は、ものすごい勢いでベッドから起き上がった。
本物だ。実物だ。
諒ちゃんが、ようやく帰ってきたのだ。
「辞書は使えって言ったけど、ベッドまで貸すとは言わなかったぞ」

「あ、う…ごめんなさい」
まだ回らない頭のまま、謝る。
「そういうとこが、子どもなんだよなぁ…」
むっ、としてちょっと睨むと、諒ちゃんは苦笑している。
そんな諒ちゃんを見ていると、帰ってきたんだなぁ、と安堵感が体中に沁み込んだ。

諒ちゃんは、あのカードを覚えているだろうか。
私がカードを発見してから既に1年半経っている。
つまり、諒ちゃんがメッセージを書いてから、もう2年も経っているのだ。
けれどそんな心配は、すぐに杞憂に終わった。
諒ちゃんの視線は、私が枕元に置いていた辞書に注がれている。
「…気づいた？」
「気づいたよ」
「それで？」
聞かれて、条件を思い出した。
私が諒ちゃんを想い続けていたら、という条件だった。
私は辞書を開くと、今度は私が書いたメッセージを諒ちゃんに見せた。

メッセージを読んだ諒ちゃんは、ふわりと笑った。
そして、言葉の代りに、ぎゅっと私を抱きしめる。
それから気づいた時には、私の背中はベッドに押しつけられていた。
「諒ちゃん…」
ちょっとだけ、咎めるように名前を呼ぶと、見たことのない意地悪な顔が覗く。
「考え無しにこんなとこにいるお前が悪い」
こんなとこ、というのはベッドのことだ。
さっき、子どもだと言われたことを思い出し、“警戒心”が無いと

言われたのだとわかる。
それでも、今まで知らなかった顔を見られて嬉しくなってしまう私は、相当諒ちゃんに参ってるのだ。
「おばさんいるのに」
「…キスだけ」
仕方ないなぁ、という言葉は声にならなかった。
まだ肝心な言葉も聞いてないのに、諒ちゃんの唇から伝わる気持ちで、胸がいっぱいになる。
それでも聞きたいのは、べつにワガママじゃないでしょ。
諒ちゃんの服を軽く引っ張ってキスを止めると、言葉を催促する。
諒ちゃんはイタズラっぽく、視線をカードに向けた。
“Ｅｖｅｎ ｉｆ ｙｏｕ ｗｏｎ'ｔ ｔｅｌｌ ｍｅ ａｎｙｔｈｉｎｇ, Ｉ'ｌｌ ｎｅｖｅｒ ｃｈａｎｇｅ. Ｉ'ｌｌ ｂｅ ｈｅｒｅ ｔｉｌｌ ｔｈｅ ｅｎｄ.”
（もしも何も言ってくれなくても、私はずっと変わらないよ。ずっとここにいるよ。）

前半の言葉は余計だった。
そう思ってじとりと見上げると、諒ちゃんはついに吹き出してしまった。
それから、まじめな顔になって私を見つめる。
「嘘だよ。…好きだよ、もうだいぶ前から」
「だいぶ前から？」
「家に帰ってきて、昔と全然変わったちぃに驚いた」
「そりゃ、昔は幼稚園生だったし」
「あぁ、正直どぎまぎした」
「でもそんな素振りなかった」
「幼稚園生のちぃが、たまに頭にちらつくんだよ。いい年した大人が何考えてんだ、って思ってた。

けど、ちぃがしつこいから、俺もだんだんごまかせなくなって、観念したってわけだ」
「しつこいって…」
「ずっと待たせて悪かったな」
「…待ちくたびれたよ」
そんなこと思っていないけど、諒ちゃんの気持ちが嬉しいけど、ちょっと言ってみたくなった。
困った顔をするのかな、と思ったけど、諒ちゃんは笑った。
「もう1秒も待たせないよ」

本棚の端に、小さな箱。
辞書ばかりのストイックな本棚にそぐわない、キレイなリボンのついた箱。
中身を示唆するように、薬指にキスが落ちた。

辞書ばかりの本棚　2（後書き）

またしても2話編成です。
大人になるほど優柔不断になるのでしょうか。
そんな人たちを書くと長くなってしまうみたいですね^^；

おまけに、慣れない英語を使ったせいで、疲労感が…。
学校卒業してから一度も操っていないので、間違ってる恐れアリです。
ミス発見した方はこっそりメッセージ送ってください。
こっそり修正します…。

電気スタンドのスイッチ

従兄の家に泊まりに行くと言ったら、友達から変だと言われた。
同じ部屋で、同じベッドで寝ると言ったら、中学2年にもなって、そんなことはありえないと言われた。
普通だと思っていた私は、首を傾げた。
「だって、ちかちゃんだよ？」
そう言ったら、友達はいっせいに、私をかわいそうなものを見るような目で見てきた。
なぜか溜息をつきながら私の頭を撫でてくれたけど、それ以上は何も言われなかった。
どうして友達がそんな反応をしたのか、私にはよくわからない。

従兄の周（ちかし）―通称ちかちゃんは、お母さんの双子のお姉さんの子どもで私と同じ年。
お母さんたちは一卵性の双子で、ちかちゃんも私も母親似のせいか、昔から顔も背丈も似たようなものだ。
毎年、大晦日と元旦の一泊二日で行っていて、今年も同じ日程だ。
お泊りセットを準備して、お土産もちゃんと持って、上機嫌で靴を履く私にお母さんの声。
「忘れ物無い？」
「大丈夫だよ」
語尾に音符が付きそうなくらい浮かれた声に、お母さんが苦笑する。
でもだって、1年ぶりのお泊まりは楽しみでしかたないからしょうがない。
「ちかちゃんに会うのが楽しみなのはわかるけど、そんな浮かれて、途中で怪我したりしないでよ？」
「平気だって」
「そうそう。ちかちゃん、カッコよくなってるらしいわよぉ」

「はぁ？　何それ。私と大して変わんなかったよ」
「それは去年の話でしょ。今は変わってるわよ」
「…行ってきます！」
なんとなく、変わっていると言われたのが嫌で、さっと立ち上がって出発した。
友達もお母さんも、変なことばかり言ってくる。
私はただ、毎年恒例のお泊まり会を楽しみにしてるだけなのに。

ちかちゃんの家は、電車を４回も乗り換えて行くほど遠い。
大きな荷物を持って電車に乗るのは多少辛いけれど、改札を出るとちかちゃんがいつも迎えに来てくれているのだ。
「みぃちゃん」
お迎えはちかちゃんだと思っていた私は、ちかちゃんじゃない声で呼ばれて驚いて顔を上げた。
「え、あれ？　おばさん？」
「周ちょっと用事で出ちゃって。でも車のほうが楽でしょ」
「あ、うん。ありがとう」
いつもと違う始まりに、少しだけ変な感じがする。
ちかちゃんのお迎えは自転車で大変だけど、お泊まりに来たって感じがして嬉しかった。
車は楽だけれど、なんとなく違和感は拭えない。

「お邪魔しまーす」
ドアを開けて声をかけると、リビングからおじさんが出てきた。
「よく来たね、みぃちゃん」
「こんにちは」
「荷物持って行こうか？」
「自分で持ってくから大丈夫」
お土産をおじさんに手渡してから、ボストンバッグを抱えて２階に上っていく。

階段を上って左の突き当りのドアが、ちかちゃんの部屋だ。
いないとわかってるけど、一応ノックしてドアを開ける。
相変わらずきれいに片付いている部屋を見回して、泊りに来たんだな、と実感する。
荷物を置くと、なんとなくはしゃぎたい気分になって、ベッドにダイブした。
そのままごろりと横向きになると、サイドテーブルに置いてある小さな電気スタンドが目に入る。
毎回毎回泊るたびにする、小さなケンカの原因だ。
私は小さな電気が点いていないと眠れないし、ちかちゃんは暗くないと眠れない。
ぎりぎりまで言い争って、スイッチを入れたり切ったりした後、結局私が泣きついて点けたままにしてもらったりして。
多分今夜もそんな感じだろう、と思うと自然と笑顔になる。
ちかちゃん、早く帰って来ないかな。

そろそろ紅白が始まる、という時間。
おじさんとおばさんとコタツに入って、おでんをつつき始めた時。
玄関のほうから音がして、ちかちゃんが帰ってきたのがわかる。
食べてる途中で行儀が悪いけど、私はコタツからさっと出て玄関まで迎えに行った。
ごそごそと靴を脱いでいるちかちゃんに、そのまま飛びつく。
「ちかちゃん！」
「ぅわ、なんだよー」
「…あれ、ちかちゃん？」
「…なに」
ものすごい違和感を感じて、私はちかちゃんからそろりと離れた。
まず、声が違う。
去年はちょっと掠れ気味だったけどまだ高かった声が、今は普通に低い。

そして、抱きついたときの感じ。
ちかちゃんをじっと見て、目線が同じだと確認する。
でも、ちかちゃんと私の立ち位置を考えると、絶対におかしい。
私は既に部屋に上がっていて、ちかちゃんはまだ玄関に立ったままなのだ。
ぼんやりとちかちゃんを見ている間に、ちかちゃんは靴を脱ぎ切って私と同じ場所に足を乗せる。
去年まで2センチしか違わなかったちかちゃんが、今は見上げる位置にいた。
よくよく見ると、顔つきもちょっとシャープになっていた。
去年までは私とそんなに変わらない顔だったのに、なんか違う。
しかも、「なに」だって。
去年までは、「なぁに」ってかわいく言ってくれてたのに。
「…ちかちゃんじゃない」
「はぁ？」
こんなのちかちゃんじゃない、と咄嗟に思う。
なんだかわけがわからない気持ちになって、私はリビングに舞い戻り、コタツにもぞもぞと座った。
おばさんが、ちょっとだけ面白そうな顔で私を見る。
「周、ずいぶん変わってたでしょ」
「ちかちゃんじゃないよ、あれ」
「ふふっ、ここのところ急に背も伸びたしねぇ」
笑いごとじゃないよ、と心の中で思っていたら、手を洗ってきたらしいちかちゃんがリビングに来た。
空いていた私の左の辺に座って、ただいまとか、いただきますとか言った後、自分でお皿によそい始める。
相変わらずちくわぶを除けるとか、猫舌で冷めるまで気長に待つとか、ようやく知っているちかちゃんが見えて、なぜかひどくほっとした。

交替でお風呂に入っておじさんたちに挨拶して、ちかちゃんの部屋に行くと床にお布団がひいてある。
不思議に思いながらベッドの方を見ると、ちかちゃんは座って本を読んでいた。
「なんで、お布団？」
「穂（みのり）はそっち」
ちかちゃんに呼び捨てされたのは、初めてだった。
どうしてか、心臓がドキドキする。
でも、やっぱり違和感も大きくて、それもお布団を眺めているとだんだん大きくなって、急に反抗したくなった。
「やだ。ベッドがいい」
「あのなぁ」
「一緒じゃ、やなの？」
「……べつに」
たっぷりの間が開いて、しかも何か言いたそうな顔だったけど、それでもちかちゃんは少しずれて私が入る隙間を作ってくれる。
私はお布団を飛び越えて、いそいそとちかちゃんの横に滑り込んだ。
ちかちゃんは本を置いて、リモコンで部屋の照明を消す。
残っている灯りは、件の小さな電気スタンドのものだけだ。
「…狭い」
「文句言うな。俺だって壁が当たるから腕が痛い」
「ちかちゃん、大きくなりすぎだよ」
「急に伸びてきたんだよ。でもその分成長痛きついし」
「今何センチ？」
「夏で１７２、多分今はあともう３センチくらいいってる」
「てことは、１年で…２０センチ！？　おかしいよ、それ」
ちなみに私の年間の最高記録は、小５のときの１６センチだった。
あのときは、ちかちゃんより若干背が高くなって優越感に浸ったりしたけど、今となっては何て事のないことだ。
しかも、中２にして私の身長は既にほとんど止まり気味だったりす

る。
この先どんどんちかちゃんだけが大きくなっていくのだと思うと、今日初めてちかちゃんと会った時みたいな、変な気分になった。
いつもはスイッチを切ろうとするちかちゃんが、今日はそうしない。今年のお泊まりは、いつもと違うことが多すぎて、おかしな気持ちになる。
「ちかちゃん、今日は電気消さないの？」
「…消したくないんだろ」
ちかちゃんが優しいのは昔からだけど、こういうのは無かった。なんだか、そこかしこがむずむずして嫌な気分になって、思っても無いことを言ってしまった。
「べつに。暗くてももう平気だし」
「そうか？　じゃ、消すか」
ちかちゃんが上半身を起こして、ベッドが微かに軋んだ。その音に、わけもわからず体温が上昇したような気がして、私は焦ってちかちゃんを止めに入った。
「やっぱ消さないで！」
「うわっ」
私がシャツを掴んだせいでちかちゃんはバランスを崩して、スイッチへ伸ばしていた手を私の顔の横につく。
その反動で、私の頭が軽くバウンドした。
「なん、だよ危ねぇ…」
仰向けで横になる私の真上から、ちかちゃんの声が降ってくる。見上げたちかちゃんは、私の知っているちかちゃんではなくて、どこか怖いと感じた。
「おい、穂。なに泣いてんだよ」
焦ったちかちゃんの声を聞いて、ようやく自分が泣いていることに気づく。

「わかんない。わけわかんないよ、もう」
苛立ちをぶつけるように、覗き込んでくるちかちゃんの肩を押した。
でもちょっと揺れるだけで、全然堪えてないのがわかって、ますます涙が出てくる。
「ちかちゃん、なんで今日お迎え来なかったの？」
「え？　あ、悪かったよ。友達に呼ばれてて」
「なんで変わっちゃったの？　なんで、お布団ひいたの？　なんで…っ」
ちかちゃんの答えを遮って矢継ぎ早に言う私を、ちかちゃんは仕方なさそうに見ていた。
私は自分がした質問が理不尽なものだと頭の隅ではちゃんと理解していたけれど、どうしても言わずにはいられなかった。
どうして、同じままで、ずっと変わらずにいられないのだろう。
本格的に嗚咽を漏らし始めた私に、ちかちゃんは私の体をちかちゃんの方に向かせてからそおっと腕を回してきた。
そんな風にされたのはやっぱり初めてで、驚いたせいか、涙は急に止まった。
「仕方ないだろ。どうしたって、俺は男で、穂は女なんだから」
ちかちゃんの静かなその声を聞いて、泊りに行くと言ったときの友達の反応が思い浮かぶ。
今までずっと一緒だったのに、性別が違うと離れなくてはいけないのか、と思うとそれは嫌だ。
他の誰と離れても、ちかちゃんとは離れたくない。
「でも、ちかちゃんとは、ずっと一緒がいいよ」
「…本気でそう思ってる？」
「どういう意味？　嘘なんてついてないよ」
「それなら、離れなくてもいい方法があるよ」
「どんな？」
「俺の彼女になればいい」
「どうやって？」

ちかちゃんが、少しだけ笑うのがわかって、ちょっと恥ずかしくなる。
小学生のころから、付き合っている子たちは周りにもいたから、彼氏とか彼女とかいう言葉はもちろん知っている。
でも、私は付き合ったことも告白したりされたりしたこともないから、どんなことか本当には知らないのだ。
それにしても笑うなんて、と睨もうと思ったら、そおっと回されていた腕が少しだけ強くなった。
「穂も同じようにすればいい」
「同じ…」
少しだけ考えてから、私もちかちゃんに腕を回してみた。
「こう？」
「ん」
短く答える声が、振動で伝わってくる。
今までにないほどちかちゃんと近い位置にいて、ドキドキしてるのにどうしてか落ち着く。
今日ずっと感じていたはずの違和感や不快感は、いつの間にかきれいさっぱりどこかへ行ってしまっていた。
いつまでも同じではいられないとしても、関係は形を変えながらどこまでも続いていくことができるのだろう。
もう一度友達の反応を思い出したけれど、今度は否定的な感情は生まれなかった。
「ね、ちかちゃん」
「ん？」
「これで彼女になったの？　じゃあ、ちかちゃんは彼氏？」
「…そうだよ」
「ふぅん。…あったかいね」
笑ったちかちゃんから、また振動が伝わる。
あったかくて、心地よくて、ちかちゃんにこのままひっついていたら、暗くても眠れそうだった。

「ちかちゃん、電気、消してもいいよ」
「さっき止めたくせに」
「いいから、消してみて」
ちょっとちかちゃんの体重がかかった後、スイッチの音がして、部屋は暗くなった。
一瞬怖くなって、ちかちゃんの背中に回した手にぎゅっと力が入ったけれど、すぐに治まる。
「大丈夫か？」
「うん。ずっとこうしててね」
「…おやすみ」
「おやすみ」
この夜、私は初めて灯りを点けずに眠った。

翌朝、起こしに来たおばさんは、一緒に眠っていた私とちかちゃんを見ると、手加減なしでちかちゃんの頭を叩いた…らしい。
「痛ぇっ」
ちかちゃんはもちろん叩かれて、私は叩いた音とちかちゃんの声で目を覚ます。
ちかちゃんががばっと起き上がったせいで、くっついたままだった私も寝ぼけ眼のまま起き上がる羽目になった。
でもなんだか怒っているらしいおばさんの顔がすごく怖くて、意識は瞬時にはっきりする。
「周！！　あんた」
「あー…悪かったよ！　けど仕方なかったんだって！！」
何事かを怒鳴りかけたおばさんに、ちかちゃんは声を張り上げて言い訳する。
何のことかわからないでいたら、おばさんは急に心配そうに私を見つめた。
「みぃちゃん、何もされてない？」
「え？」

「してねぇよ！　アホか！」
おばさんとちかちゃんが私の何について話しているのか、会話の意味は正直よくわからなかった。
ただ、オフになっているスイッチと、布団の下で繋がったままのちかちゃんの手が、少しだけ大人になったような気分にさせてくれた。

電気スタンドのスイッチ（後書き）

初々しい子を書きたくなりまして、こんな感じに…。
小学校まで仲良かった男友達が、中学に入ったら急に疎遠になること、とかってありましたよね？
そんな、異性だと意識したときの戸惑いとかが伝わったらいいな、と思います。
普通は女の子の方が早熟だと思いますが、周と穂に関しては逆パターンで行ってみました。
周は穂に流されたふりしてうまいこと誘導しましたよね、実はお腹が黒い人なのかもしれません（笑）。
なんか昔を思い出したりして、書きながら楽しめました＾＾

失くしたはずのリモコン（前書き）

“ブックカバーの裏側”アナザーサイドです。

失くしたはずのリモコン

しばらく仕事が忙しくて、ゆっくり会う暇も無かった。
久しぶりに取れた土曜休みに、どこかへ出かけようかと言ってみたが、家でのんびり過ごしたいと言われた。
どうやら、疲れているだろう俺を気遣ってくれているらしい。
基本わがままなくせに、かわいいことをしてくれる。
「ＤＶＤ借りてきたよ」
「あぁ、なら、こっち」
ＤＶＤプレイヤがあるにはあるのだが、デスクトップのＰＣを指す。
「なんで？」
「壊れてるんだ。本体のボタンが効かない。リモコンは失くしたし」
「ふぅん？」
それ以上追及せずに素直にＰＣにディスクを挿入し、始まった映画に早くも釘づけの恵奈（えな）の肩をそっと抱く。
少し前までは、許されなかったことだ。
壊れたＤＶＤプレイヤの中から取り出せないままでいるディスクを思い浮かべて、俺は恵奈に気づかれないよう苦笑を零した。

幼馴染みは、家族にカテゴライズされることのほうが多い。
恋愛対象になっても、それは多くの場合片側通行で、関係を壊したくないがために相手に伝えることさえできないものだ。
かくいう俺もそのタイプで、ぐずぐずに甘やかしていたにもかかわらず、言えなかった気持ちは一欠けらも伝わってはいなかった。
今から三年ほど前のことだ。
「結婚するんだぁ」
彼氏ができた、とかいう段階をすっ飛ばして、恵奈は無邪気に報告してきた。
いつの間にそんな相手ができていたのか、何も知らなかった俺は、

就職活動で忙しくしていた自分を恨んだ。
けれど確定事項が覆ることも無く、恵奈はその数か月後に本当に結婚してしまった。

「幸せに」
生まれてからずっと一緒に過ごしていたのに、２２年間ずっと何も言えなかった俺の、せめてもの一言。
真っ白なドレスで眩しいくらい綺麗だった恵奈は、その言葉に素直に笑顔を見せた。
だけど、恵奈。
あれは祝福の言葉なんかじゃ、なかった。

幸せになって欲しい気持ちは本物だったけれど、それは決してあの男の横で笑う事なんかじゃなくて。
俺が、そうしたかった。
俺の気持ちなんて、少しも知らなかった恵奈が、ほんの少し憎くて。
恵奈に何も伝えられなかった自分が、恨めしくて。
それでも往生際悪く、あの男と別れて、俺に振り向けばいいと思っていた。
結婚式の前日が終わる最後の瞬間まで、その日が来なければいいと願っていた。
だから、あれはきっと、本当は呪いの言葉だったに違いないのだ。

恵奈の結婚式のＤＶＤは、おせっかいな母親が持ってきた。
俺を見る目に、僅かながら憐れみを感じた俺は、不機嫌を精いっぱい隠して受け取った。
三か月経っても、心は鈍く痛む。
恵奈との写真も想い出も何もかも、気持ちと一緒に封印したのに、そのはずなのに。
自動で再生がスタートした、ディスプレイいっぱいに映るあの日の

恵奈が、笑うのを見ていられない。
リモコンの停止ボタンを押した。
思いなおして、もう一度再生ボタン。
けれど、やはり停止ボタンを押す羽目になる。
「…馬鹿だろ」
今更だ。
いい加減、受け入れなければならないのだ。
一度目を瞑り、長く深く、胸の内を吐き出すように息を吐き尽くすと、再生ボタンを押した。
式の最中は目を背けていた誓いのキスも、今度は目に焼き付ける。
見れば見るほどに、恵奈は幸せそうに笑っている。
再生が終わり、メインメニューに戻ったところで、俺は停止ボタンを押した。
ディスクを取り出すのも億劫に感じるくらい、体中から力という力が抜けたような気がしていた。
どうせなら、俺がもう後悔するのも馬鹿らしいほどに、あの男と幸せになればいい。
そうすれば、俺が恵奈を忘れることも、情けなかった俺自身を忘れることも、もっときっと簡単になる。
そうなればいい。
そうなるべきだ。
そうなってもらわねば。

そうして、言い聞かせた俺を嘲笑うように。
「なんだか、恵奈ちゃん…大変みたいよ」
たまに実家に帰った俺には、その都度おせっかいな母親からいらぬ情報が吹きこまれた。
結婚してまだ一年も経っていないのに、既に女性問題が噴き出しているらしい。
それも、相手はひとりではないとか。

言われてみれば、披露宴で新郎側の招待客も女性がわりかし多かったような気がする。
まぁ、それも今更なのだが。
俺の反応が薄かったためか、母親は俺が冷たいと言ったが、俺は俺で、封をした気持ちを破るまいと必死だっただけだ。
何度もそれが繰り返され、やがて、恵奈が離婚することになったというのも、母親から聞かされた。
あの時の気持ちは、何とも言えない。

家に戻った俺は、恵奈の結婚式のＤＶＤをもう一度再生した。
二度と見るまいと、二度と恵奈を想うまいと、そう思っていたのに。
ディスプレイに映る恵奈は、間違いなく笑っているのに、俺の頭の中で、泣き顔に変換される。
あんな男と一緒になるからだ、という恵奈に対する燻った怒り。
恵奈を俺から取り上げたくせに、というあの男に対する卑屈な憤り。
何も言えずにただ送り出した、それどころかまるで呪いのように一時でも不幸を願った過去の俺に対する、猛烈な後悔。
こんなことを望んでいたのではないのに。
決して、そうではなかったのに。
説明のつかないあらゆる感情が一気に噴き出して、大声で叫び出したくなった。
口を開いて、けれど言葉にならなかった声のその代わりに、手からリモコンが飛び出た。
壁にぶち当たって電池の蓋が外れたらしい、飛び出した電池がこちら側に転がって、床に落ちた。
本体は、ローボードの裏側に落ちたのか、視界から消えた。
あの時から、ＤＶＤプレイヤは意味をなしていない。

玄関を開けると、明るい照明と恵奈の揃えられた靴が目に入って、口元が緩んだ。

平日の夜でも、恵奈はよく食事を作りに来てくれるのだが、今日もいるらしい。
いつもドアの音にすぐに気付く恵奈だが、今日は反応が無い。
廊下を進んでいくと、映画でも見ているのか、音が漏れ聞こえる。
たまには驚かせてやるのもいいか。
「ただいま」
後ろから声をかけると、不自然に、びくりと肩が揺れた。
と同時に、けたたましいテレビの音がわっと鳴り響く。
「おか、おかえり」
明らかに挙動不審な恵奈に、浮き立っていた気持ちは影をひそめ、俺は口を噤む。
今、恵奈は何を見ていた？
急にテレビ画面に変わったのなら、録画していた何か？
いや、ハードディスクに残っているのは、贔屓にしている海外リーグのサッカーチームの試合くらいだ。
恵奈の趣味に合うものなんて、無い。
それなら、一体何を。
考えながら恵奈に近づいた俺は、固まったように動かない恵奈の指の中にある物に目を見開いた。
「それ……」
拾ったのか、とは言えず、かといってどこにあったのか、などと白々しく問うのも憚られ、その先の言葉を失う。
どこにあるのか本当はわかっていたのにそのままにしていたものだから、それを知らなかった恵奈にはどの言葉も不適当だ。
それは、失くしたはずの、失くしたことにしていたはずの、リモコン。
先に動いたのは、恵奈だった。
「リモコン、あったよ。後ろに落ちてて。あ、電池勝手に入れちゃったけど、よかったよね？　なんか、蓋ちょっと割れてたけどまだ

使えるし」
口だけが勝手に動いている、そんな感じ。
俺に話しているようでいて、視線は決して合わない。
動揺の理由は、痛いほどわかる。
恵奈は、過去の事情を激しく後悔していて、しかも、俺に対して、必要も無い負い目を感じているきらいがある。
恵奈が簡単に見つけられるような場所にあったリモコンだ、俺がわざとそのままにしていたのだろうと、きっと悟っている。
しかも、割れた蓋は、故意に投げつけられたせいだと簡単に予想がつくだろう。
それに加えて、中に入っていたディスクがあれでは、極めつけというものだ。
「恵奈」
呼びかけに、恵奈は少しだけこちらを向いた。
けれど、未だ戦慄く唇から、言葉が止まらない。
「も、びっくりしちゃったぁ。だってもう無いわよ、このＤＶＤどこにも。全部捨てちゃったし、みんなにも捨ててもらったし。まっさか啓都（ひろと）が持ってるなんて、知らなかったわ。ほんと、知らなか…っ」
「恵奈」
もう一度強く名前を呼ぶと、ようやく恵奈は言葉を切った。
手からリモコンを取り上げ、恵奈を抱き寄せる。
髪を撫で、言い聞かせるように額に唇を押しつけているうちに、体を強張らせていた恵奈はおとなしく力を抜いて俺にもたれかかった。
普段は気が強そうにしているくせに、こんな時は痛々しい泣き方をする。
声も出さずに涙だけ流す、それも、優しくされた時にだけ。
不器用な奴。
昔は、もっと素直に感情を出すほうだと思っていたのに。
いつからこんな風になってしまったのか。

あの男のせいか、それとも…俺のせいか。

しばらくしてようやく涙の止まった恵奈は、けれどまだ俯いている。
俺は、リモコンのエジェクトボタンを押してディスクを取り出すと、そのままシュレッダへ投下した。
唸るモータ音に、バリバリという音が重なって、驚いた恵奈が顔を上げた。
ディスクは、三つに切断されている。
「これで、ほんとにもうどこにも無いな」
言い含めるような言葉に、恵奈はゆるく笑った。
心臓が、握りつぶされたみたいに、痛む。
俺が煮え切らないばかりに、恵奈を辛くさせた。
しかも、何度も。
恵奈が自分を責めることくらい、わかっているのに、知っていたのに。
「…ごめんな」
「なんで、啓都が謝るの」
「俺が、悪い」
「何…が？」
全部だ。
いつだって、俺からは何もせず、恵奈を甘やかすふりをしてその実俺が甘えていた。
俺は何も選ぼうとせずに、恵奈に全てを押しつけていた。
無責任で、傲慢で、狡い。
けれど、言葉にできなくて、恵奈を見つめた。
多分、今の俺は、そうとう情けない顔になっている気がする。
キスが、したい。
またそんな狡い考えが浮かんで、その自覚のゆえに打ち消そうと、恵奈の唇に向く視線をまぶたで遮断した。

触れないはずだった唇が、触れたのはその直後。
驚いて目を開けた俺の視界に、また涙ぐんでいる恵奈が映った。
「恵奈？」
「…許す、って言って」
「は？　何が、謝ってるの俺だし」
「いいから、言ってよ。全部許す、って言って」
「…全部、許す」
「ほんとに？　ほんとに、全部許す？」
意味を図りかねつつも言った後のしつこいくらいの確認に、過去のことか、とようやく思い至る。
俺が謝っていたはずなのに、なんで俺の方が偉そうに許すとか言っているのか。
「なあ、そうじゃなくて」
「許してくれないの？」
反論を許さない雰囲気に、仕方なく黙って恵奈の言う通りにすることにする。
「許す。ほんとに、全部許す。…とっくに許してた」
微笑んで聞いていた恵奈は、最後のひと言に少しだけ目を見開いて、鮮やかに笑った。
そのまま、恵奈が抱きついてくる。
俺を宥めるような、甘い声が耳元で聞こえた。
「じゃあ、私も啓都のこと許す。全部、許してあげる」
結局、それが言いたかったんだな。
何が悪かったのかも言えないでいる俺に、気にしていないのだと納得させるためだけの、免罪符のやり取り。
「…ばかだな、恵奈」
「なにが？」
「お前は、俺に甘過ぎるよ」
「それは啓都のほうでしょ」
「いや、お前だよ」

「だから、啓都だって」
そうやって、延々繰り返し言い合って、俺も恵奈も譲らずに最後は結局お互い噴き出して笑ってうやむやになった。

どちらからともなく、惹きあってキスを何度も繰り返した後。
不思議とこれまでと雰囲気が違って感じる。
それに気付いた俺も恵奈も、お互いになんとなく照れくさいような気分になった。
「…ＤＶＤ見る？」
「そうだな。こっちで見るの久しぶりだわ」
「リモコン見つけてあげたの、感謝してよね」
「はいはい」
おざなりに返事をしながら、恵奈の借りてきていたＤＶＤを挿入する。
見ないふりをしていた心の中のわだかまりは、今になってようやく昇華したのだと思う。
今度こそ、間違えない。
決意めいたものを思いながら、横でディスプレイを見つめる恵奈のこめかみにキスをする。
誓うように何度か繰り返していたら、邪魔するな、とでも言うようにリモコンで叩かれた。
けれどその頬も耳までもうっすらと上気しているのがわかって、俺は笑いをかみ殺す。
そして、陰の無い恵奈の表情に、思う。
もう、大丈夫だ。
俺は、恵奈は、俺たちは今度こそ、間違えることはない。

失くしたはずのリモコン（後書き）

短編は通常、続編みたいなのは書かない主義なんですが。
このふたりはどうしても書きたい気になっちゃいまして…。
今度は啓都サイドで。
なかなかにヘタレな感じにできあがりましたが、わりと好きな子ですw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9919y/

半径2M以内で

2011年12月25日00時52分発行